

910.23-Sh46ㄅ

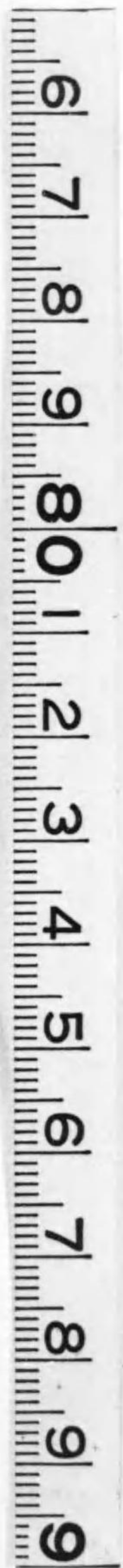


1200500754336

023

46

ㄅ



始



25 7 18

910.23

SH 46

(7)

2/790

紫

式

部

人とその作品

島津久基著
日本書院刊

目次

序言 一

まへがき 三

縁族の人々 七

家系 七

父母、爲時夫妻 一〇

兄、惟規 一五

夫、宣孝 二二

女、太貳三位 二九

その生涯 三九

少女の日 五九



結婚生活	五二
宮仕時代	六〇
紫式部の名	六七
交友	九四
創作	一一〇
源氏物語	一一〇
紫式部日記と紫式部集	一一六
作品を通して観た紫式部	一一五
女性としての紫式部	一一五
家庭人としての紫式部	一六三
歌人としての紫式部	一七二
作家としての紫式部	一八〇
紫式部の文藝論	一九〇

紫式部の教育観……………二〇一
紫式部の宿命観……………二〇二
紫式部の女性論——雨夜の品定……………二〇六
結 び……………二一六
紫式部略年譜（假案）……………二一八
附
紫女と清女（随想）……………二二五

序言

紫式部が源氏物語を書いた爲に、妄語戒を犯した罪によつて地獄に墮ちたといふ説がある。かと思ふと、紫式部は觀世音菩薩の再來で、衆生濟度の目的から源氏物語を作る爲に、假に人間世界に姿を現されたのだといふ説もある。一方は文藝に理解のない人々の考へ方であり、他方は藝術を宗教と結びつけて考へようとする行き方である。この兩極端の説が同じ時代に無批判に並んで行はれたのも、そしてどちらも佛教に關聯してゐるのも、中世思潮らしいところがあつて、興味があるといへる。

が、紫式部は笑つて、わたしは何でもない平凡なたゞの人間で、そして地獄へも極樂へも行かずに、現にかうして生きてゐるのですと言ひはしないだらうか。

私は平生源氏物語を読みふけつてゐると、まのあたり紫式部から話しかけられてゐるやうでならない時がしばしばある。源氏物語は千年近くもの昔に現れた世界文藝史上の驚異である。同時にそれが千年後の私達にいつも生き生きとした新鮮な姿で呼びかけてくれるのも、大きな驚異でなければならぬ。何といふ心にくい天才作者の筆であらう。

この天才女流作家の傳記研究としては、有名な「紫家七論」のやうな、すぐれたものもあるが、現代の讀者の爲の手頃なものはあまりないやうである。私は曾つて不十分ながら紫女の傳記を書いてみたが、それももうかなり以前のことになつたし、まだもつと言ひ足りなかつたところもあるしするので、今改めて舊稿を骨子として新しいものにした氣になつたのである。

なほ附録として、隨想「紫女と清女」の一篇を添へておいた。兩女性の比較によつて、紫女の性格や横顔が一段と理解される助けともなうかと思つてであ

る。

昭和二十二年秋

著者しるす

紫式部

— 人とその作品 —

まへがき

紫式部に關する傳記資料は頗る乏しく、僅かに紫式部日記や家集その他によつて、その生活の斷片を窺ひ得るだけである。従つて彼女の境遇や心境、精神的生
活といったものを知るには、日記や家集と共に、その作品源氏物語が重要な役割
を持つことになるのである。

紫式部日記によつて彼女の傳記や人間としての式部を觀ようとしたのは、周知
の如く紫家七論の安藤爲章である。即ち爲章の七論は

其一 才德兼備

其二 七事共具

其三 修撰年序

其四 文章無雙

其五 作者本意

其六 一部大事

其七 正傳説誤

の七項目に分けて紫女の人物・業績・經歷及び源氏物語創作の目的並びにその價値等に互つて論證を試みてある。時に過褒の嫌ひがないでもないけれども、考證苟くもせず、論斷おほむね肯綮を得て、よくこの稀世の女流天才の眞面目を髣髴せしめてゐる。眞に紫女の文學を愛好し理解し、その文を通して正しく紫女を知らうと努めた篤學の士といふべきである。

右七項の内、一・二は人物論、三から六までは源氏物語論、特に三は源氏物語成立年時の考證、最後の七は、源氏物語作者及び創作動機に關する諸説批判並び

に紫女の宮仕年代の考定で、他に系圖を附してその中にも式部一家の經歷に關する資料を掲げて論證がしてある。又其二の「七事共具」といふのは、

一 學者を父として生まれたこと。

二 歌才ある兄よりも聰明な神童であつたこと。

三 漢學に長じ又樂才のあつたこと。

四 禁廷行事諸般の知識經驗の豊富であつたこと。

五 時代が上つ世に偏せず、末の世にも降らず、中葉にして文質兼ねた世に生まれあつたこと。

六 女にしては珍しいほど各地の名所舊跡を旅行した見聞の體驗が多であつたと推定し得られること。

七 女であること。特に上流ならず、下流ならず、中流の階層の女性であつたこと。

の七條件を指してゐるので、この七條件の共に具備せられる如きは殆ど望まれ得ないことであるからこそ、源氏物語の前にも後にもこれに比肩するものが現れなかつたのであると斷じてゐるのである。七論の「七」と相應じさせようとする意識がはたらいたと見えて、幾分「七」に拘はれた氣味があり、強ひて「七事」にしたかの如き感が興へられないでもないが、なか／＼面白いそして要を得た觀方であると言へる。

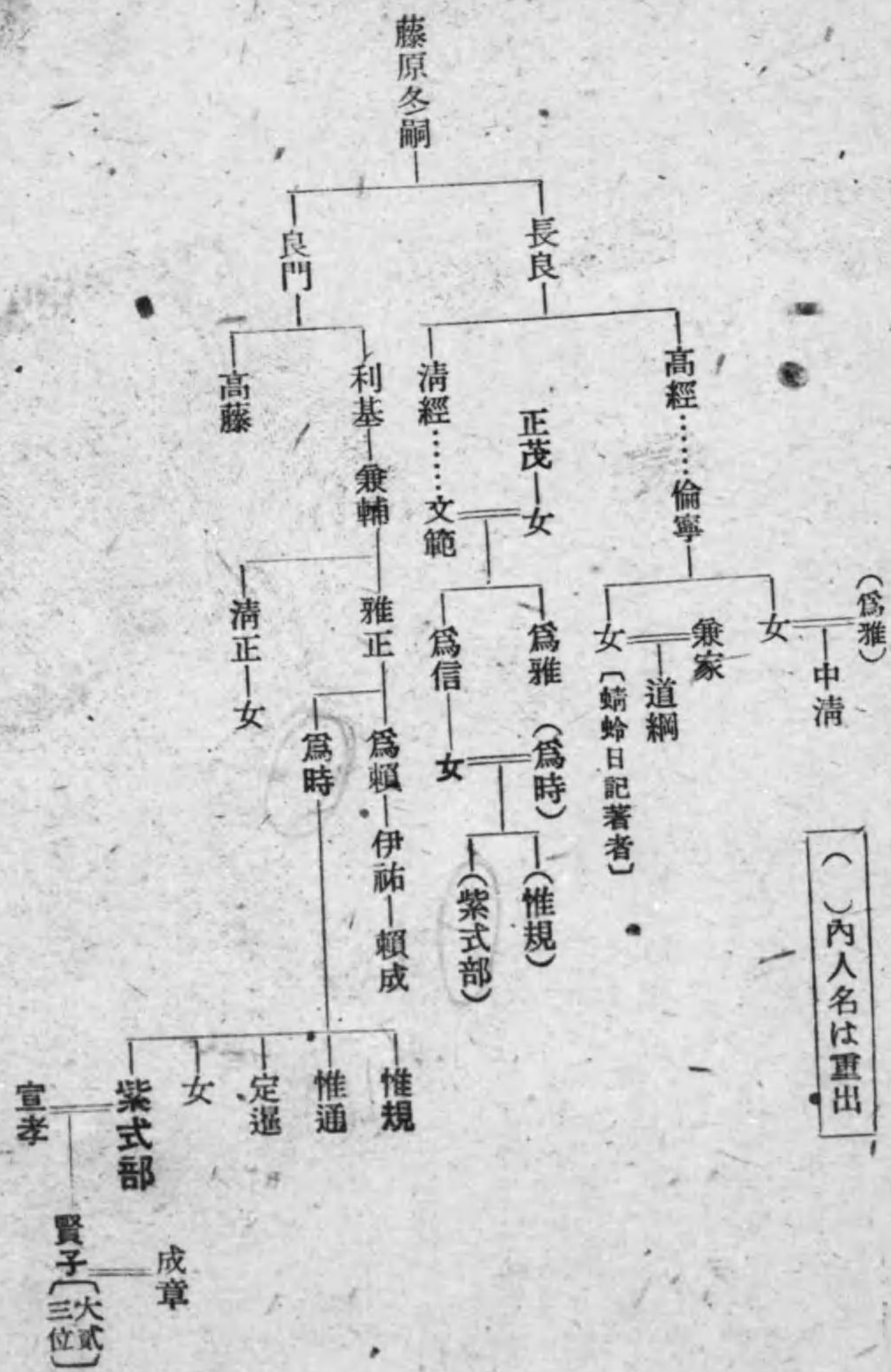
式部日記が平安宮廷乃至貴族生活の風俗資料として、或は他の語で言へば、有職故實の貴重な研究資料としての價値は無論高い。が同時に作者の傳記資料としての意義も亦大きいものであるのはもとよりで、これに着目した爲章の眼識は、今から思へば當然のやうであるけれども、やはり卓抜であつたと言はねばならぬ。我等の紫女傳研究も、結局此の先輩及びそれに續く諸家の行績の跡を追ふに過ぎないので、若し幾分でもそれを補強することが出来れば望外の幸である。

縁族の人々

家系

紫式部の家はその先藤原氏の名門に出て、且代々及び縁族の中には文學の道に名を得た人々が少くはなく、式部が源氏物語の名篇を著し得たのも決して偶然ではない感がある。次にその略系圖を掲出してみよう。(この略系圖は尊卑分脈・源氏物語諸古註・紫家七論・紫式部日記・紫式部集等に據つて作製した。)

即ち式部は閑院左大臣（贈太政大臣）藤原冬嗣の第六子贈太政大臣良門を祖としてゐる。そして曾祖父兼輔は中納言從三位、世に堤中納言と稱せられた延喜時代の著名な歌人で、式部が源氏物語の中で好んで屢々引用する「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」の有名な歌を始め、五十餘首が古今・後撰・新古今等の勅撰集に載つてゐるほどである。家集も一卷ある。祖父雅正またたけ、その弟清正共に又歌人で、その詠は後撰集や拾遺集に入つて居り、清正には家集もある。雅正の子で式部には伯父の爲頼も同じく歌人であり、拾遺・後拾遺以下にその詠が採られ、この人にも家集が遺されてゐる。清正の女で爲時の從兄妹に當る人も拾遺集の作者である。又式部の母方の縁續きの中には、式部の先輩女流作家で、源氏物語には少からず範を仰がれてゐる蜻蛉日記の著者（右大將道綱の母）の見出されるのも興味が深い。



父母、爲時夫妻

かく代々歌道に名を獲た父祖の血を受けて生まれた式部の父爲時も、同じく亦文學的才能に勝れた一人であり、大學の文章生の出身で、文章博士菅原文時の門下として詩文を以て當代有数の文人の中に數へられてゐたことは、江談抄(第五、詩事)に大江匡衡から行成大納言に送つた書中の一節として

爲憲・爲時・孝道・敦信・舉直・輔尹、此六人者、越於凡位一者也。

とあるのでも分る。御堂關白記などにも、御前や道長第の宴席で詩文を賦したことも屢々記されてゐて、その才能は自他共に許してゐたらし。

その官歴は、文章生から式部丞、藏人を兼ねつゝいて式部大丞となり、更に外記・大内記となり、長徳二年には越前守に任じ、後、左少辨となり、寛弘八年に

更に越後守に任官し、長和三年頃歸京して同じく五年出家したといふのがその概略である。(なほ同時に同名の人々が居たことと關聯して、爲時の任歴につき、拙著源氏物語新考の「四人(五人?)爲時」の項に考證を試みたことがあるから、詳しくはそれに譲る。)長徳二年越前守に任じた時には一つの逸話が十訓抄や今昔物語・今鏡などに傳へられてゐる。即ちその年の縣召に初め爲時は國司としては低い位置の淡路守に任せられたのであつたが、それに對しての歎訴の申文の中に、

苦學冬夜紅淚盈巾、除目春朝蒼天在眼

の句があつたのが一條天皇の叡感に入るの榮に浴し、御軫念に恐懼した道長の計らひで急に源國盛に内定してゐた大國越前の受領に更められたといふのである。その文才が直接の立身にさへ役立つたといふ面白い挿話といへる。本朝麗藻には、彼が越前守在任當時、越前に來てゐた宋人と應酬した詩も載せてあるが、同集中から左に道長の第で作つた「度々水落花舞」と題した一詩を例示して置かう。

花前春暖鳳池清。落蕊舞來度水程。
分岸粧奢風漸送。上橋簪動月相迎。
飄超石瀨紅裙轉。散過波塘玉履輕。
此地猶應真勝地。宸遊再奏九韶聲。

(先年有臨此地。故獻此句。)

爲時は又詩文のみならず歌才もあり、後拾遺・新古今などにその作が載せられてゐる。

おくれても咲くべき花は咲きにけり身を限りとも思

ひけるかな(後拾遺、春下)

われ一人ながむと思ひし山里に思ふことなき月もす

みけり(同、雜一)

など、少し理屈ばいところはあがあるが、漢學者にして又歌人でもあつた事を立證し

てゐる。

かやうに彼は自身文學に秀でてゐたばかりでなく、子供達の指導教育にも非常に熱心で、且嚴格であつたらうことは、後にも引く如く、日記の中に述べられてある例の息男の惟規(のよのり)に史記を學習させて、兄よりも傍で聞いてゐる妹式部の方が却つてよく記憶するのを、常に歎息したといふ有名な條でもよく分ると思ふ。殊に梅檀は双葉よりかんばしき式部の文學的天才には、非常に感歎し、女であることを惜しみつゝも、史記・日本書紀など始めさまざまの漢詩漢文などを熱心に教授したのであらう。式部のあの驚くべき漢學の素養、博識はまた爲時に負ふ所が頗る大きいと言はねばなるまい。

爲時は小右記によれば、長和三年越後から歸京し、五年四月二十九日に園城寺で出家したことになつてゐる。御堂關白記の寛仁二年一月二十一日の條には、既に爲時法師と記されてあるのを見ても、それは信じられてよい。出家の動機を惟

規・式部二子の死歿に關係せしめてゐる説もあつて、若しこれが眞實に近い推定とすれば、爲時の子に對する愛の如何に深いものであつたかが窺はれる。

父爲時については以上のやうに稍詳しく知り得られるが、母に關しては殆ど傳へられてゐない。尊卑分脈や源氏物語古註の系圖に常陸介爲信の女（或説には攝津守爲信の女、又は右馬頭爲信の女堅子ともある。）と載せてあるのみである。

更に日記や家集にも全然母に關する記録が残されてゐず、父よりも兄よりも最も親しかるべき筈の母の思ひ出らしい記事すら見えないのは、恐らく幼時に既に歿してゐたものと想像せられる。その上、源氏物語に現れる人物で、幼少の中に母に死別し、孤兒となつて、險の裏に母の面影を慕ふといふのが澤山ある。先づ第一に主人公光源氏が三歳の時母の桐壺更衣を失つてゐるし、その子夕霧も誕生と同時に母葵上を失ひ、又頭中將の女玉鬘も物心つかぬ中に母夕顔に死別し、宇治十帖の大君・中君姉妹も母宮に幼時に死別してゐて、しかもそれらの人々は皆

母にも代る暖い父の愛にいつくしまれて成長してゐる。これを必ずしも直ちに作者の境遇に當てはめて考へようとするわけではないが、源語中重要な人物の大半がかうして幼時母に死別してゐるのを見ると、さうした中に作者式部の面影が浮んで來ないこともない氣がする。

兄、惟規

兄^{の兄の}惟規のことは、紫式部日記のさきにも觸れた父から史記を習ふ件に見えるが、尊卑分脈には「母攝津守爲信女」とあつて式部と同腹であり、御堂關白記によれば少内記・兵部丞・藏人・式部丞等に歴任してゐて、父と共にやはり歌道にその名を謳はれた人らしい。その作は後拾遺・金葉・千載・玉葉・風雅等の各勅撰集に見える他、今昔物語（卷二十四）に「極夕和歌ノ上手」と見えてゐる七、そ

の他彼の歌道に關する逸話が二三傳へられてゐるのからも察知出来る。

惟規の人柄は、十訓抄(第一)に「藤原惟規は世のすきものなりけり」と記されてゐるので、彼の性情の一端は窺はれる。これを裏書する逸話として、今昔物語(卷二十四)の「藤原惟規讀和歌被免語」や十訓抄(第十)に、大齋院の御所に仕へる女房の所へ忍んで行つた藏人惟規が、侍に見咎められ名を問はれたが、答へないので、門を閉ざされてしまつた時、

かみがきは木丸殿このまるとのにあらねども名のりをせねば人咎めけり

と一首詠んだので許されたといふ話が傳へられてゐて、和歌によつて女に通ふ罪を免せられたなどは、彼もやはり當時平安流の風流才子の一人であつたに違ひない。(惟規が藏人になつたのは寛弘四年一月であるから、同年から九年(長和元年)頃までの間のことであらうし、大齋院は村上天皇の皇女選子内親王と申上げた有

名な文學好きの宮でおはしたから、その侍共まで風雅を解した人達であつたと見える。右の歌は金葉集(雜上)にも出てゐる。

惟規は父爲時が寛弘八年越後守として赴任した時、その後を追うて(但しそれは藏人の任を辭してからであつたから、同年或は長和の初め遅くも二年頃のことと思はれる。)越後に下る途中から重病を獲て終に父の任地で歿したことが、今昔物語(卷三十一)「藤原惟規於越中國死語」や十訓抄(第一)に語られてゐる。その臨終の逸話にも、やはり風流人らしいあはれさが感じられる。それはもう助からないといふ時、

都にも戀しき人のあまたあればなほこのたびはいかむとぞ思ふ

と辭世の句を詠じ、又得度を渡す僧に中有の旅の有様を問ひ、若しその旅路に嵐にたぐふ紅葉、風に靡く尾花がもとに、松蟲・鈴蟲がすたく風情があるならば、

少しも苦しいことはないと言つたといふのである。そしてその辭世の句の最後の「ふ」といふ文字を書き終へずに息が絶えたといふ一段の哀話と、更に又俊祕抄・宇治大納言物語などでは、父爲時が非常に悼み悲しんで、その「ふ」の一字を書添へたといふ傳説になつてゐる。この「都にも」の辭世は後拾遺集にも載せられ、それには京の齋院の中將に贈つた形見の歌として出てゐる。齋院の中將といふのは源爲理の女で、式部日記に批評されてゐる女性中の一人でもあり、そして大齋院の女房であるから、先の「木丸殿」の歌の際の女房といふのも恐らく同一人であらう。

なほ後拾遺集(別)には

父のもとに越後にまかりけるに逢坂のほどより源爲善朝臣の許に遣しける

藤原惟規

逢坂の關打越ゆる程もなく今朝は都の人ぞ戀しき

といふ歌もあるから、父の任國へ下向したことはこの歌でも助證せられる。そして又紫式部集に、

遠き所へ行きにし人の、なくなりけるを、親はらからなどかへりきて、

悲しきこと言ひたるに

いづ方の雲路と聞かば尋ねましつら離れけむ雁の行方

の一首が見えてゐるのが、兄の遺骨の歸京を式部が悲しんで詠んだものであらうと思はれる。この歌は千載集(哀傷)にも出てゐる。これは長和三年秋のことであらうから(爲時は此の年六月に退官を願ひ出て居り、又この歌からも秋であることが知られる)、惟規の客死は寛弘八年以後長和元年か二年の秋であらう。

惟規の歌才は以上のやうな逸話によつても言ひ傳へられてゐて、——その才能と頭腦は、少くとも式部日記の記述によれば、妹式部の上には出なかつたらしい

と思はれるけれども、兎に角——文學者として名高い父爲時の教へを受けただけに、相當のものではあつたらう。直接に文學的影響を妹式部に與へたといふまではなかつたとしても、父と共に、妹式部をしておのづから文學的雰圍氣の中に浸らせ、幼時から文學といふものに非常な興味と憧憬とを抱かせ得ただけの力は多少なり有つてゐたと見てよいであらう。又彼の風流才人型の所謂「すき者」としての舉動は、小説家としての式部の經驗を豊富にさせてくれたことに、直接間接に必ず役立つたらうことは推測に難くない。

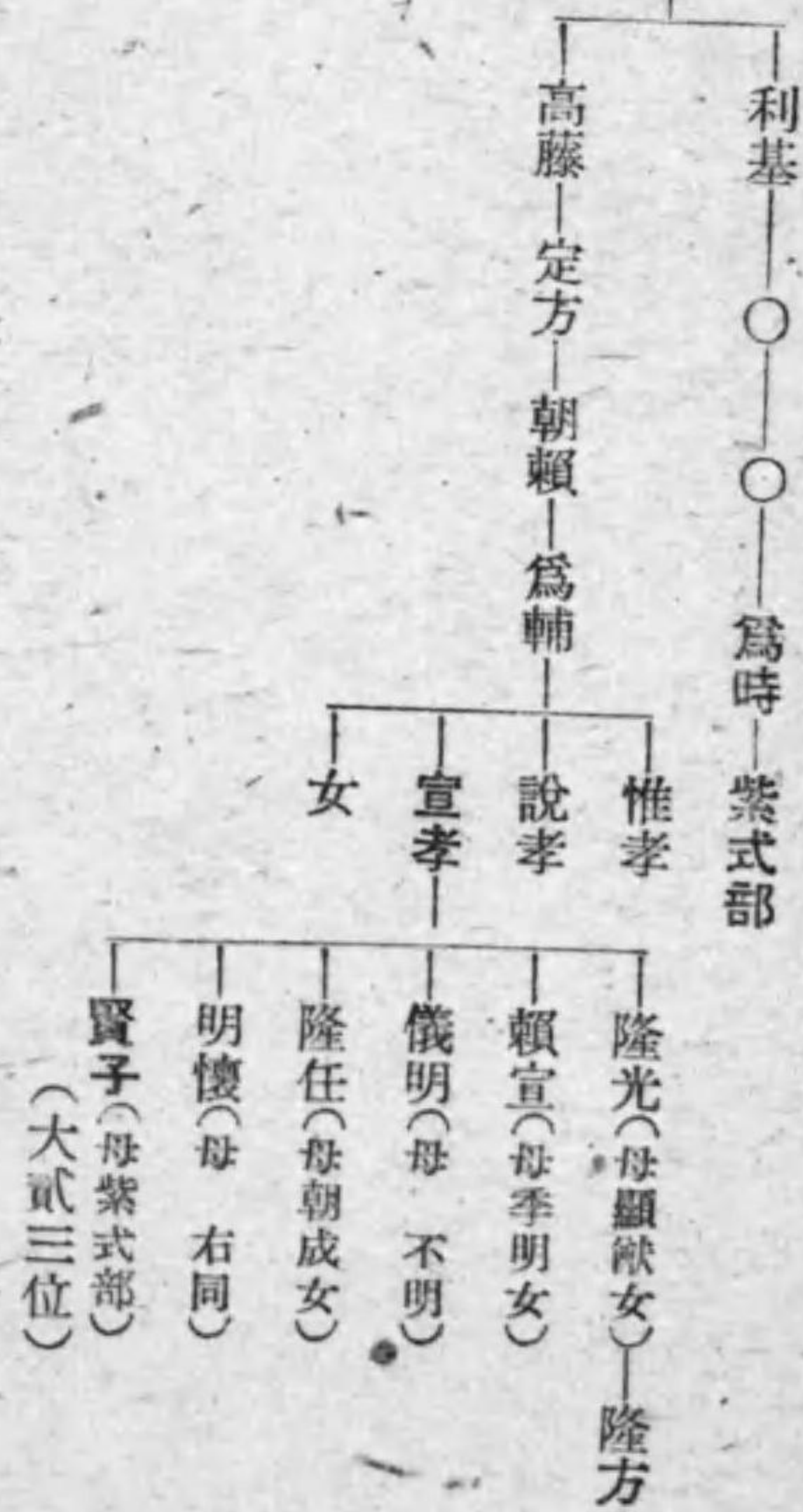
式部には長兄惟規の他に、母不明の安藝守惟通・阿闍梨定暹の二人の兄弟があり（前掲式部の歌の詞書中の「はらから」とあるのは、この内を指したのであらう。）、更に紫式部集に「姉なりし人なくなり云々」といふ文句が見えるところから見て、一人の姉もあつたらしいが、いづれも經歷についてはそれ以上不明である。（古系圖では男性を先づ掲げる慣行であるから、惟通・定暹が必ずしも式部

の兄であるとも確言し難い。又姉も惟規より上の最長姉であつたのか、惟規の次であつたのが早く亡せたのかも明確でない。回想の記述（四一頁参照）から推せば、式部は惟規の差次の妹らしくもある。尤も日記に他の二兄弟のことが見えないのは、同母の關係で惟規は式部と同一の家に居た爲であることも考へられなければならない。）

夫、宣孝

紫式部の夫藤原宣孝は勤修寺内大臣（贈太政大臣）藤原高藤四世の孫に當り、式部と同じく冬嗣を遠祖とする人で、爲時一家とは同族の間柄である。次にその系圖を掲げる。

冬嗣—良門



宣孝は藏人・左衛門尉・中宮大進・皇后宮亮・辨等に歴任し、筑前・備中・備後・周防等の國守を勤め、長徳四年右衛門權佐、同八月二十七日兼山城守となつた人である。そして式部の父爲時が藏人であつた華山天皇の永觀二年頃、やはり同じ藏人の職を勤めてゐた。式部との結婚が成立したのは一條天皇の長保元年頃と思はれるから、右衛門權佐時代のこと、當時既に四十歳前後にはなつてゐ

た筈である。

宣孝は紫式部と結婚する前に、そして又その前後にも数名の女性と關係を持つてゐたことが想像される。尊卑分脈に、下總守顯猷の女、讃岐守平季明の女、中納言朝成の女などが擧げられてゐて、その當時の風習として、式部も宣孝が通ふ女性の中の一人であつたらしい。そして宣孝には系圖に示すやうに、紫式部との間に生れた大貳三位の他に、隆光始め異母の五人の子があつた。

彼は式部と結婚して僅か兩三年の後、長保三年四月二十五日に歿してゐることが尊卑分脈によつて知られる。御堂關白記の長保二年二月の條に、宣孝が宇佐への勅使を勤めた事や(前年十一月下向した由日本紀略に見える)、同年四月に平野の臨時祭の折もお使として參つた事が記されてゐるのから見て、その頃は元氣で勤仕してゐたことがわかる。この頃が式部との結婚生活時代で、官歴から言つても宣孝の生涯で最高の年時に屬する。戀愛から進んでこの新婚を獲た宣孝は、旁、得

意なものがあつたと想像される。勿論式部の文名も後年のやうに顯著ではなかつたらうが、彼女の才色は一族や親しい人々の間には相當話題になつてゐたに違ひないし、父の爲時も折々訪れたであらう宣孝に、同族の親しみから、自分の女の自慢話をした折もあつたであらうから、宣孝が式部に關心を寄せるやうになつたのも決して不自然ではなかつたと思はれる。

では宣孝はどんな性質の人であつたらうか。式部集に「近江守のむすめに懸想すと聞く人の、ふた心なしと常にいひ渡り」とあつたり、「もとより人のむすめを得たる人なりけり」などあるのが宣孝を指すと思はれるから、戀愛交渉の間も亦結婚以後も、若き新妻の心を不安と嫉妬で惱ませたり、或はたまにしか顔を見せないで、夜通し待ちぼうけさせたりした事もあつたらしく、相當にその道では活躍家の、但しかなり男性的な情熱の人物であつたのではないかと想像される。能因の玄々集に「宣孝右衛門佐一首」として

いとみける女の甲斐守にあひぬと聞きて

かひがねをみるとか聞くはまことかやよこほりふせ
るさやの中山

といふ詠を載せてあるのも、これを助證する。當時に於てこんな男性は敢へて珍しいところではないが、(なほ右の歌は古今集東歌の甲斐歌を本歌としてある。)式部にとつてはかなり内生活を支配されたところが大きいものがあらうし、彼女自身からも切離され得ない強い愛着の存在であつたことは疑ひを容れない。源氏物語中でいへば、光源氏といふ複雑な性格の構成要素として何等かの姿で採入れられてもゐるであらうと共に、外貌的にはその光源氏に對抗する頭中將あたりの行動の一面の感じを見る氣がしないでもない。歌の方はあまりうまくないやうだが、才人で年よりは若く見え、顔も一寸美しかつたのではあるまいか。

彼の趣味なり行狀なりが頭中將式に相當形式的で派手でもあつたと想像させら

れる挿話が、枕草子の「あはれなるもの」の條に見出されるのは興深い。「御嶽詣でに行く時は、立派な身分の人でもなり姿をひどくやつして參詣する風習と聞いてゐるのに」と枕草子の筆者は前置して、次に、

右衛門佐宣孝は、「あぢきなき（ツマラス）事なり。たゞ清き衣を着て詣でむに、なでふ事かあらむ（何ノ不都合ガアラウ）。必ずしも『あしくてよ（ワルイ衣服デ參レ）』と御嶽宣はじ」とて、三月晦日（ヤヒツゴロ）に、紫のいと濃き指貫、白き襖（狩衣。上衣）、山吹（表ハ黄、裏ハ黄青ノ衣）いみじくおどろおどろしき（派手ニ目ダツタ）などにて、隆光（宣孝ノ長男）が主殿（とも）の亮（すけ）なるは、青色の襖、紅の衣、摺りもどろかしたる水干袴にて、うち續き詣でたりけるに、歸る人も詣づる人も、珍しく怪しき事に、すべてこの山道に、かゝる姿の人見えざりつ、とあさましがりしを（驚キ呆レタノデアツタガ）、四月晦日（ウツキツゴロ）に歸りて、六月（みたびきとをかま）十餘日の程に、筑前の守失せにし代りに（後任ニ）なりにしこそ、げに言ひ

にけむにたがはずもと聞えしか。

と記してゐる。（六月十餘日とあるのは、正暦二年のことである。）奇を好む清少納言をさへ驚歎せしめて、一筆なしには居れない氣持にさせたこの父子の派手な装衣は、どんなに人目をそばだたせたことであつたらう。この印象的な容姿を眼前に浮べてみると、宣孝といふ人物の好みや生活の有様が、大凡想像されて來るやうに思はれる。

この御嶽詣に同行した宣孝の長男の隆光は、系圖にも示した如く、下總守顯猷の女を母とする人で、大貳三位の異母兄に當る。御堂關白記に藏人に任せられてゐることが見え、後に備中守や右京大夫に昇進してゐる。歌人としても名を残した人らしい。その子の隆方も有名な歌人で、勅撰作者部類に、「但馬守藤隆方（備中守隆光子）」とあつて、江談抄（第三、藤隆方所能事）に、殿上でこの人の所能を數へたところ十八箇を算したと記してゐる位、多藝多能な才子であつた。後拾遺集

(戀二)に、

暮る、間は千歳を過す心地して待つはまことに久し

かりけり

の詠が載つてゐる。

宣孝等は同母三兄弟であるが、次兄の説孝のりたかについては枕草子「職しきの御曹司の」の段に、清少納言が頭の辨行成を説孝と間違へて、説孝ならばかまはぬと失禮なことをして、後で大騒ぎをしたといふ滑稽が語られてある。これから見ると、説孝といふ人は女官達からあまり尊敬されてゐなかつたやうで、弟宣孝ほどの才人ではなかつたのではなからうか。又妹は三蹟の一として知られる書道の大家藤原佐理の室である。

女、大貳三位

女大貳三位の名は賢子といひ、宣孝と式部が結婚した翌長保二年に誕生したと推定せられる。そして宣孝は三年四月にはすでに歿してゐるから、大貳三位は生まれついてまもなく父を失つた孤兒であつた。若しさきの想像が許されれば、式部の幼時とは反對に、そしてこれは事實に於て、母親の愛のみを受けて成長したのであつた。成長の後には正三位太宰大貳高階成章と婚し、又その以前に後冷泉天皇の御乳母として奉仕し、典侍に補せられ、自身も從三位の位を賜はつた。式部の女には古來一女説と二女説とがあるが、それは河海抄に

大貳三位辨局狭衣作者を生ず。

とあつて、一人なのか、或は大貳三位と辨の局との二人なのか一寸分らない記述

がしてあるので、後世誤つて紫式部に二子があつたとする説を生じて來たのらしく、石村貞吉氏の提唱以來今日では一女説が通説となつてゐる。なほ岷江入楚に引かれてある系圖には、

從三位 承曆一卒

賢子

後一條院御乳母

太宰大貳成章卿之爲妻、仍大貳三位號。

母紫式部狹衣之作者歌人

とあつて大貳三位が狹衣物語の作者とあるから、河海抄の「辨局狹衣作者」といふのも恐らく上の「大貳三位」を承けてゐるので、且榮華物語（楚王の夢卷、萬壽二年）に

大宮（上東門院）の御方の、紫式部が女の越後の辨、左衛門督（藤原兼隆。關白

道兼の男）の御子うみたる、それぞ（若宮ノ御乳母ヲ）仕うまつりける。

と書かれてあるのから推して、成章に嫁する以前は、後冷泉天皇の御乳母として越後の辨と呼ばれ、それを略して辨の局とも云つたのであらうかと考へられる。

右の岷江入楚の系圖には、大貳三位を後一條院の御乳母としてあるが、これは既に尊卑分脈にも

後一條院御乳母、從三、號大貳三位

賢子

母紫式部、成章卿室

としてあるのから來たらしく、後一條院の御乳母は藤原基子で、近江守源高雅の妻となつて章任のりたよを生んだ全然の別人であり、これ亦やはり大貳三位と呼ばれた女房であつた爲に、兩者混同して來たのであらう。年齢から云つても年代から云つても、紫式部の女が後一條天皇の御乳母であるといふのは何としてもをかしい。後一條天皇御降誕の寛弘五年は大貳三位は僅か九歳でなければならぬからである。式部の女ならば、後冷泉天皇に奉仕したとして初めて當を得る。新古今集

（賀）に、

後冷泉院をさなくおはしましける時卯杖の松を人の子に賜はせける

によみ侍りける

大貳三位

相生のをしほの山の小松原今より千代の蔭を待たな

む(この歌は大貳三位集にも所載)

又同集(雑中)に、

大貳三位里に出で侍りけるをきこしめして

後冷泉院御歌

まつ人は心ゆくともすみよしの里にとのみは思はざ

らなむ

御かへし

大貳三位

住吉の松はまつとも思ほえて君が千とせのかげぞ戀

しき

などあるのを見ても、賢子が御乳母としてお仕へしてゐた面影が髣髴し、又天皇もこの乳母に如何に御懐き遊ばしてであつたかが察知出来る。この點でも大貳三

位と越後の辨とは必ず同一人であらうことが愈々確かめ得られる。更に又現に中

納言定頼がかれたらになつた時、菊花に添へてやつた

つらからむ方こそあらめ君ならでたれにか見せむ白

菊の花

の一首を、後拾遺集(秋下)では大貳三位として出してあるが、權中納言定頼集には「越後の辨」として出てゐるのである。

安藤爲章は紫家七論の系圖に、榮華物語(殿上の花見卷)の女院住吉詣に名が見える「大貳三位・辨の乳母」の二人を式部の女としてゐるが、この年は後一條天皇の長元四年であり、同物語に大貳三位は「内の御乳母」とあり、且その子を「丹波守章任」としてあるのからも、その大貳三位は賢子とは別人の前述後一條天皇の御乳母の基子の方であること明らかで、「辨の乳母」といふのが即ち賢子のことである。

さてその大貳三位の稱呼についてであるが、大貳の方は夫の官名から來てゐること論なしとして、三位は自身の位に對する呼稱であらう。橘三位・藤三位・北野三位などと紫式部日記に出てゐる女官達の呼名の場合から、さう推定するのが自然のやうに思はれる。後一條天皇の御乳母の基子も亦從三位であるから、自身の位で呼ばれてゐたと見てよい。賢子の場合偶然夫も亦三位であつたから混同して考へられ易い。兎に角同名の先輩のある間は越後の辨で、成章に嫁して以後、同名の人も逝いてからは大貳三位と呼ばれたと考へてよばであらう。又その結婚前の越後の辨の名は、祖父爲時が最後に越後守に任官し、且その直前に左少辨にも任じてゐるので、その祖父の官名をそのまま、呼名とせられたものと思はれる。前に掲げた河海抄の文や他の系圖にも記してあるやうに、この大貳三位は狹衣物語の作者と古來信せられてゐるが、確證はない。(他に祿子内親王宣旨を作者とする説も有力である。) 同物語の註釋書狹衣下紐も大貳三位説であるが、かう

した説の生まれて來る所以は、惟ふに母が源氏物語を書いたから、その源氏を模倣した狹衣を、又その女が書くこともあり得ようといふ位の想像に基づく所が大きいのではなからうか。又源氏物語の宇治十帖を、大貳三位が母の筆を繼いで書いたのだといふ説もあり、一條禪閣の花鳥餘情に、

或人の申し侍るは、宇治十帖は女の大貳三位書けり。その證據あきらかなり云々。まことにても侍らば……。

と記されてゐて、著者兼良すら一應疑問としてはゐるが、かういふ説が古く行はれてゐたことが分る。世諺問答の跋にも、兼良の曾孫の兼冬が右の説を承けたらしく、大貳三位書繼説を支持してゐるけれども、いろ／＼の點で宇治十帖も紫式部一筆といふことが立證出來るから、從ふことは出來ない。

が、狹衣は書かなくとも、又宇治十帖は書き繼がなくとも、大貳三位は文才一世に響く紫式部を母としてゐるだけに、やはり歌人としての名は相當に謳はれて

わたことは確である。後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今その他の勅撰集にも多く載せられてゐるが、中にも後拾遺集(戀二)の

有馬山あなの笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはす

る

は小倉百人一首にも採られて人口に膾炙し、又大貳三位集(一名藤三位集)といふ家集一卷も残つてゐる。(但し右の歌は此の家集には見えない。)賢子が母の式部に死別したのは十六七歳の折のことらしい。それから約十年後(萬壽二年)に二十六歳で後冷泉天皇の御乳母となり、その後大貳成章に嫁したといふ順序になる。そしてその間、特に越後の辨時代、高名の紫式部の女として若い男性達の間で當然異常な關心を持たれたことは推するに難くなく、現に前出の左衛門督兼隆の他、道長の息頼宗や公任大納言の息定頼等とも相當の間柄であつた事實が數々の贈答歌に語られてゐる。

三位の歿年は前掲岷江入楚の系圖の「承暦一卒」とあるに従へば、白河天皇の御代に七十八歳の高齡で世を去つたことになるが、他の旁證はない。但し後拾遺集(春下)に、後冷泉天皇の永承五年六月五日祐子内親王家歌合の時の

吹く風ぞ思へばつらき櫻花心と散れる春しなれば

の詠が出てゐるから(大貳三位集にも所載。又祐子内親王家歌合の方にはその全く同じ「吹く風ぞ」の歌が左の一番に典侍として出てゐる。天皇の御乳母は御即位後に典侍に補せられる慣例であるから、この頃典侍であるのは相當であらう。)此の年即ち五十一歳までは少くとも生存した確證は擧げ得られるわけである。

世に大貳三位集と混同され易い二條太皇太后宮大貳集(續國歌大觀本にも大貳三位の集として誤り收めてある。)の奥書には、同太皇太后(令子、白河天皇皇女、御母は中宮藤原賢子)に奉仕した女房大貳を、高階成章と大貳三位との間の女とし、又成章が大貳となつたのは康平元年正月七日で(永承五年から八年後)、同年二月十六日任地で六十九歳で薨じたと見え

る。これが眞ならば三位と成章との結婚は夫が大貳に赴任するかなり以前であつたと考へるのが穩當であらう。(なほ三位も筑紫に下つて、文字(門司)が關で詠んだ歌が大貳三位集に出てゐる。)が、尊卑分脈にも高階氏系圖にも成章の子には女子は見えないし、又この大貳は郁芳門院根合(堀河天皇寛治七年)の時の女房と同一人とすれば、「故通宗朝臣女」と註してあり、大貳三位の所生と定めてよいかは稍疑問である。(この根合に人に代つて詠んだ一首が大貳集に見えるのが、同根合には「實持」の名で出て居るから、大貳集の作者とその大貳は同人であることが分る。但根合に出てゐる大貳自身の歌二首は何故か却つて同集には見えない。)通宗は歌人若狭守藤原通宗で後拾遺・金葉の作者、その父は太宰大貳經平であるから、大貳の呼名はこの祖父の官名から來たとして別に不當ではない。なほ作者部類には此の二條太皇太后宮大貳(又、皇后宮大貳)の父祖については何等記載が無い。

その生涯

少女の日

紫式部の少女時代とは、凡そいつ頃に當るか、そしてどういふ風に養育せられて成長してゐたであらうかなどいふことは甚だ漠然とした想像しか許されない。

紫家七論の爲章は、日記中の文句をもとにして、

寛弘五年に、道長公四十三歳にて、式部に艶言のたまひ、同六年わたどのの戸をた、きわび給ひしなどを思へば、いたく老嫗とも見えす、又みづから、さだ過ぎたるよし書きたれば、若く盛りなる女とも見えす。榮花物語殿上花見巻に、中宮威子、三十一歳にならせ給ふを、さだ過ぎ給ふと書きたるを、思ひ

合すべし。

として、式部の年齢を大體寛弘五年に三十一歳前後と推定しようとしてゐる。先づこの説が當らずといへども遠からぬ感じがするのは、寛弘五年といへば、夫宜孝に死別した七年後であり、日記の同年七月（或は八月）道長がさし出した花に對して

女郎花盛りの色を見るからに露の分きける身こそ知らるれ

と詠んでゐるのでも、又例の消息文といはれる中にも、

年もはた、よき程に成りもてまかる。いたうこれより老いぼれて云々。

といふ文句があるのでも、且この他にも散見する歴世觀や諦觀、或は非常に成心的な内省の態度等によつても、さして若い女であるとは思はれないことに矛盾しないからである。又兄惟規の年齢が、寛弘五年には兵部丞藏人といふその官職か

ら想像して、三十五六歳にはなつてゐたらうと思はれるのに併せて、下に引く本文のやうに、幼年時代兄が父爲時から史記を習つてゐる傍で、聞いてゐる自分の方が遙かによく覺えたと思懐した文に、「式部丞といふ人の童にて」と書いてゐるなどからして、兄との年齢の差が十歳以上も隔つてゐるとは思はれないから、爲章のこの説を肯定しても大した難はあるまいと思ふ。さてこの説に依據して逆算すると、式部の生年は大體圓融天皇の天元元年前後といふことになるのは、與謝野晶子・石村貞吉の諸氏によつても既に想定せられてゐるところである。甚だ不確實な推定ではあるけれども、他に資料とすべき手がかりが見出せないのので、今やはり假にこの説に従つておく。

かうして式部は代々文學歌道に秀でた祖先の血を承け継ぎ、しかも文名高い學者爲時を父として、生れながらに文學的環境に恵まれてゐたことは、その天稟の才能と相俟つて、彼女にとつて非常に幸福なことであつた。尤も當時文學が非常

に盛んで、殊に女流文人が續々輩出して一つの偉觀を呈してゐた程の時代であつたので、その時流の影響も大きにあつたであらうこともうなづかれるが、家庭教育、特に「文に心いれたる親」爲時の、娘式部に與へた感化と指導とが、いよいよ天才少女の育成にあづかつて力あるものがあつたらうことは想像に餘りがある。既に屢々説き及んだところであるが、幼年時代の式部の天才を物語る好例證として、彼女自身亦半ば得意な回想にひたりつゝ述べてゐる日記の一節に、

式部丞といふ人の（ガ）、童にて、史記といふ書讀み侍りし時、聞き習ひつゝ、彼の人は遅う讀み取り、忘るゝ所をも、怪しきまで敏く侍りしかば、文に心入れたる親は、「口惜しう、男子にて持たらぬこそ幸なかりけれ」とぞ、常に歎かれ侍りし。

とあるのは、有名な話柄である。父の歎聲にも知られるやうに、若し男兒であつたなら、惟規よりも遙かに頭腦の優秀なこの神童を、必ずや自身の學問の後繼者

としたかつたに違ひない残念さが、女としては過分すぎる和漢の學習をば自然娘の式部に課したでもあらう上に、

三史五經の道々しき方を明らかに曉り明さむこそ愛敬なからめ、などかは女と言はむからに、世にある事の公おほやけたくし私につけて、無下に知らず至らずしもあらむ。わざと（ワザ／＼）習ひ學ばねども、少しもかど（才智）あらむ人の、耳にも目にも留まること、自然じねんに多かるべし。（帚木卷）

といふ見識の彼女でもあつた筈である。否その見識が既に父の訓育の賜でもあつたと思はれる。

學問のみならず女藝一般、音樂・香道・遊戲等の上に至るまで、彼女の俊敏さは遺憾なく發揮されて、紫家七論の「七事共具」に、

「幼きほどに、さかしきとても、女は學問とげがたきものなるに、彼の學窓のさまを思ふに、打ちつゞき漢の積書を讀み、音樂已下の業に、おこたらざ

りしと見ゆ。千載集にいはく、

上東門院に侍りけるを、里に出でたりける比、女房の消息のついでに、箏傳へに、まうでむといひて侍りければ、つかはしける

紫式部

露しげき蓬がもとの蟲の音をおぼろげにてや人の
たうねむ

この箏の傳授にても、その樂才おしはかるべし。禁裏・院中、攝家の御方に
参り遊びて、元日節會よりはじめ、追儼に至るまで、恒例臨時、一とせの公
事、或は歌合・繪合・香合・蹴鞠など、優美なることのかぎりによそそのまな
こ肥えたり。

と絶讚してゐるやうに、女の身だしなみを十二分に深く廣く習得したのも、幼少
時から處女時代へかけてであつたらう。(なほ女童としての宮仕を想像する説も

あるが、信すべき根據は無い。)

これに關聯して思ひ出させられるのは、さきにも觸れた母のことである。重ね
て言へば、少女時代最も親近なるべき母親に關する想出の片鱗すら残されてゐな
いのは、既に幼時母に死別してしまつてゐたからであらうか。とすれば、式部が
女として完全に近い教育を身につけ得たのは、もつばら父の愛情によるものであ
つたと想像してもよくなるかと思ふ。

長徳二年父の爲時が越前守として任地に赴いた時、式部も亦伴はれて越前に下
つたらしく、それは紫家七論も既に指摘してゐるところである。狭い都を生涯の
天地とする人々の多い中で、見知らぬ地方に旅することは、處女心に如何ばかり
喜びと珍しさを覚えさせたことであらう。その旅の途すがら、興に應じて詠じ
たものかと思はれる歌が家集に數首見える。

鹽津山といふ路のいとしげきを、賤の男の、怪しき様どもして、な

ほからき路なりや」と云ふを聞きて、

知りぬらむゆききにならすしほつ山世にふるみちは
からきものぞと

みづうみに、おいつ島といふ洲崎に向ひて、わらはべの浦といふ入
り海のをかしきを口ずさみに、

おいつ島島もる神やいさむらむ浦も騒がぬわらはべ
の浦

こよみに初雪降ると書きたる日、目に近き日野のたけといふ山の雪、
いと深う見やられるれば、

こゝにかく日野の杉むらうづむ雪をしほの松に今日
やまがへる

返し

をしほ山松のうは葉に今日やさは峰の薄雪花と見ゆ

らむ

鹽津山は北近江から敦賀へ越える山路、日野嶽は越前の山名である。又於伊津島
は琵琶湖の志那の水上にある島で、童部浦と老幼を對比して興じたのである。

近江のみづうみにて、三尾が崎といふ所に、網曳くを見て、

みをの海網ひく民のひまもなて起居につけて都戀し
も

物珍しき風色の數々に心愉しい傍からは、さすがに都離る、初の長旅の心細さが
胸に湧く。

磯の濱に鶴の聲々に鳴くを

磯がくれ同じ心になづぞ鳴く汝が思ひ出づる人は誰
ぞも

鶴の飛び交ふのを見ても、都に居るなつかしい誰彼の事ばかりが思ひ出されてならない。

降り積みていとむつかしき雪をかき捨てて、山のやうにしなしたるに、人々のほりて、なほこれ出でて見給へと云へば、

ふるさとに歸る山ぢのそれならば心やゆくとゆきも

見てまし

これは恐らく越前に到着して後の其の地での冬の詠であらう。(後に述べる式部の親友で、姉妹の約束をした女性が九州へ旅立つのと、式部がこの越前への旅に出たのが略同じ頃であつたこと、及びその九州からの消息をこの旅先で受取つたことも、「おのがじし遠き所へ行き別るゝに」「肥前といふ所より又おこせたるを、いと遙かなる所にて見けり」などある家集の詞書で知り得られる。)

又家集に「年かへりてからひと見に行かむと云々」と詞書して、「春なれど白根

のみ雪いやつもり云々」とある歌があるのを見れば、此處で越年したことも確認出来る。「からひと」は當時越前に來てゐた宋人であらう。父爲時は彼等と詩作の應酬をしたことは前に述べた。白根は白山である。)そして

都の方へとて、歸る山越えけるに、呼坂といふなる所の、いとわりなきかけぢに、輿もかきわづらふを、恐しと思ふに、猿の木の葉の中よりいと多く出で來たれば、

猿も猶遠方人の聲かはせわれ越しわぶるたこの呼坂

とあるのは、即ち歸京の折の歌であること明らかであり(歸山は越前杉津の邊にある五幡山)、更に、次の一首、琵琶湖畔で伊吹の白雪を眺めての、

名に高きこしの白山ゆきなれて伊吹の嶽をなにとこそ見ね

にも都近い喜びの中に、印象深い北越の想出が消し難く浮び出て來てゐるのが感

じられる。父はまだ在任中であるから、誰と歸つて来たか詳らかでないが、恐らくやはり父が公用か何かで上京したのに同伴したものであらうし、宣孝との交渉が長保の初には始まつた筈であるから、この歸京は翌三年の晩秋か初冬頃でもあつたのであらう。さすれば式部が凡そ二十歳前後と見られ得る。旅は物憂く恐しいものときまつてゐた當時に、しかも若い女の北越まで足を運んだ経験と他郷の見聞とは、後年の創作に於ける構案と詩趣の上に少からず影響したらうことは言ふまでもない。須磨下りの光源氏の旅愁には、伊勢物語の業平東下りの模擬以上に、作者の實感が籠つてゐるに違ひない。七論に式部の旅行趣味を述べて、

女にては、あまりあるまで名所・舊蹟を歴遊したりと見ゆ。

とあるのがすべて當つてゐるかは措くとしても、この越の旅は事實であり、又この旅で獲た旅行の有益さと楽しみとが、彼女の旅行趣味を誘發したであらうことも否定するに及ばなからう。

結婚生活

人生の最大の幸福時代たるべき彼女の結婚生活は恵まれてゐたとは言へない。

勿論それは夫宣孝の愛情が薄かつたといふのでは決してない。あまりにも短い幸福時代であつたといふ意味である。

紫式部が宣孝と相思の仲となつたのは、越前から歸京した翌年の夏頃であらうといふのが通説となつてゐるが、大體これに従つて考へてみると、その時代は略二十一歳を迎へた筈の式部なのであつた。家集に

人の

けぢかくて誰も心は見えにけむ言葉へだてぬ契とも
がな

返し

隔てじとならひし程に夏衣うすき心ぞ先づ知られぬ
る

とある贈答の歌が、二人の間に交された初め頃の作ではないかと言はれてゐるが、
或はさうかも知れない。そして前にも述べたが、(二四頁参照)

近江の守のむすめに懸想すと聞く人の、ふた心なしなど、常に言ひ

渡りければ、うるさくて

水うみに友呼ぶ千鳥ことならば野洲のみなとを聲た

えなせそ

や、

もとより人のむすめを得たる人なりけり。文散らしけりと聞きて、

「ありし文どもとり集めておこせずば、返事書かじ」と、ことばに

てのみ言ひ遣りければ、皆おこすとて、いみじく怨じたりければ、

正月十日ばかりの事なり。

とぢたりし上の薄氷解けながらさは絶えねとや山の

下水

などの詞書の通り、宣孝には式部の他にも交渉をもつ女性が幾人か居たし、この
二人の新しい戀愛にも相當曲折もあつたやうに見える。そして此の正月頃(翌長
保元年)二人の結婚が成立してゐることが知られる。

どういふ機縁で二人が結ばれたか知るよしもないが、これも既に言及したやう
に、宣孝が同族ではあり、父爲時と親交もあつて、屢々來往する中に互に相知つ
たと想像することが許されはしまいか。そして二人が結婚してからも、式部にと
つては宣孝はたつた一人の夫であるに反して、宣孝にとつて式部はたつた一人の
妻といふわけにはゆかなかつたので、夫の他の女性關係について、式部もやはり

普通の女のやうに怨じもし、妬みもした。右に引いた歌のやうに、いつそ別れて、しまはれたらさつぱりするだらうとも思つた時であつたらう。しかしそれは決して憎いからではない、あくまで用心深い、そして他からの批判に特に神経質な彼女の性格に加へて、やはり夫に對する愛が深まるほどそれを獨占したい願望に驅られる故なのであらう。

文の上に朱といふ物を、つぶく／＼とそゞぎかけて、「涙の色を」と書

きたる人の返しに、

紅の涙にいとゞうとまる、うつる心の色と見ゆれば
とすねてみせたり、或時はむきになつた男に應酬して、

今はものも聞えじと、腹立ちたれば、笑ひて返し

いひ絶えばさこそは絶えめなにかそのみはらの池を
つゝみしもせむ

と機嫌を取つてみたり、又或時は

四方よのうみに鹽やくあまの心から焼くとはかゝる歎
きをやつむ

と歌繪に書き添へてやる式部でもあつた。

櫻をかめにさして見るに、とりもあへず散りければ、桃の花を見やりて、

折りて見ば近まさりせよ桃の花思ひぐまなき櫻惜し
まじ

返し人

桃といふ名もあるものを時の間に散る櫻にも思ひお
とさじ

といふのも二人の唱和であらう。紫式部集に見えるこの種の贈答では、心意も技
巧も女の方が寧ろ餘裕があり、且概して宣孝は式部に一籌を輸してゐるが、

一 入る方はさやかなりける月影をうはの空にも待ちし

夜半かな

と淋しく歎き、

おほかたの秋のあはれを思ひやれ月に心はあくがれ

ぬとも

と女が切な思ひを訴へた時も無論あつた。

式部はこの結婚生活の間に母性としての喜びも味ひ得た。母性としての尊い體験も得た。いとしき一人の分身大貳三位が出生したのである。夫宣孝との間の愛の結晶に對して、式部が如何に深い母親としての慈しみを注いだかは、惟ふに源氏物語の上にそのまゝ反映されてゐて、桐壺帝の光源氏御教育、光源氏の紫上養育、或は夕霧及び明石姫訓育、宇治八宮の母亡き後の姉妹の姫の愛育、又は明石上の明石姫に對する母性愛など、すべて式部の愛娘に對する態度や心情が作中の

人物を通して滲み出てゐるやうな氣がする。これはなほ後章に詳説したい。

さて夫としての宣孝と共に送つた月日はあまりにも短く、結婚の翌々年と思はれる長保三年、式部が二十四歳の春、夫は不歸の客となつてしまつた。その時の式部の悲しみは、

世のはかなきことを歎く頃、陸奥に名ある所々かいたるを見て、鹽

釜の浦

見し人の煙となりし夕より名もむつまじき鹽釜のう

ら

と詠じられてゐるやうに、卒然として逝つた夫の幻を追うては、涙に袖をひたし續けたであらう。世のはかなき、人の命の脆さが切々と身に泌みる。源氏物語の夕顔卷に、夢のやうに夕顔を死の手に奪はれて、悲歎に沈む光君の胸中が述べられてゐるが、その心は又とりも直さず夫に死別した式部自身の心の中でもあつた

長保三年

のではないか。

見し人の煙を雲と眺むればゆふべの空もむつまじき

かな

の詠歎が、この鹽釜の詠をそのまま、移したやうなものも偶然ではないであらう。又葵上が死んで後の光君の歎き、残された幼い夕霧を見ては

草枯れの籬に残るなでしこを別れし秋の形見とぞ見

る

と歎くのも、家集の

若竹の生ひゆく末を祈るかなこの世を憂しと思ふも

のから

と詠じた式部の親なき子をいとはしむ心情と相通するものを感じさせる。

このやうに夫の早世は、元來溫和で控へ目で内省的な式部の心をいよ／＼淋し

い、厭世的なものにおし進めて行つた。そして彼女は益々寂しさを好む性質になつてしまつた。この心持は次に説く如く、宮仕に出て、華やかな雰圍氣の中に身を置けば置く程、強く自分を苦しめるのであつた。夫との死別といふものが、式部の心境に如何に大きな影響を與へたかが想像させられる。源氏物語や日記を読むと、作者の年齢以上に老成したものを感ぜさせられるのも、こゝに起因してゐるところが少なくないと思ふ。が、宣孝が式部に残していつたものは、一人子の他にはこの憂鬱性、厭世観だけであつたらうか。恐らく夫の相當派手な生活ぶり、殊に時代の慣性とはいへ、女性關係にかなり奔放であつたらしい生活は、蜻蛉日記の著者同様、式部に云ふに云はれぬ勞苦を味ははせた一面、その道のさま／＼の姿を見聞させ、又これも相當享樂生活を送つたらしい兄惟規の行狀と共に、素材の斷片をも提供しつゝ、源氏物語の執筆を促進した潜在力にもなつてはたらないのではないかつたらうか。

宮仕時代

式部は夫に死別して數年の後、一條天皇の中宮彰子に奉仕する身となつた。日記の寛弘五年十二月二十九日の條に、

しはすの二十九日に參る。はじめて參りしも、こよひのことぞかし。

とある文から想定して、前年の寛弘四年に出仕したことを知り得る。但し日記寛弘六年の部分に錯入したとせられてゐる所謂消息文の一節に、

いと忍びて、人の侍はぬものひま／＼に、おとどしの夏頃より、樂府とい

ふ書二卷をぞ、しどけなく、かう教へたて聞えさせ侍るも隠しけり。

と記してあるその「おとどし」といふのが何年を指すかが古來問題とされてゐるところであるが、この文の少し前の、やはり同じ手紙文と目されてゐる僚輩批評

の條下に、赤染衛門のことを「丹波守の北方」と記してあるのから推して、その赤染の夫大江匡衡が丹波守になつたのは、御堂關白記によれば、寛弘七年三月三十日であるから、この手紙文は少くとも寛弘七年の春以後に書かれたものでなければならず、然らば恐らく右の文の「おとどし」といふのも寛弘五年のことであらうし、その前年十二月二十九日に宮仕したとして、年次が恰當するのである。

且日記の後一條天皇の御降誕の條に、道長はじめ侍女達が、御平産を祈つて大騒ぎをしてゐる様を見て、

まだ見奉り馴るゝほどなけれど、

と記してゐるが、それは寛弘五年九月の事であるから、その前年出仕したばかりの今參りであつたと想像しても不自然はないと思ふ。この他出仕の年を、或は寛弘二年又は三年と見る説もあるが、先づ四年とするのが最も穩當であらう。そしてさきの想像年齢からすれば、この年式部三十歳であつた。

文學の華が一世に絢爛を誇つた當時の禁中では、高貴の方々の間に才色共に優れた女流文人をば、争つて侍女として奉仕せしめられる風が流行し、一條天皇の皇后宮定子に清少納言・大和の宣旨・馬内侍などの才女がお仕へしてゐたのに對抗して、彰子の立后に當つても、父道長がその權勢に物を言はせつゝ、皇后宮の侍女達に負けぬ才媛達を侍女に擇ばうと苦心したことは容易に首肯される。當時夙くも文名高かつたであらう紫式部は、即ちその選に入つた一人であらう。次いで式部が出仕した翌年には伊勢大輔、翌々年には和泉式部、そして又赤染衛門は已に紫式部より早く、皆諍々たる女流歌人が多く集められて、中宮の御簾下は目もあやな藝術の花苑を現出したのであつた。

式部が寡居時代のこととは詳述の資料に乏しいので、夫の死後宮仕に上るまでの六七年間、どう暮してゐたかが不明である。河海抄には「紫式部者鷹司殿從一位倫信女一條左官女也相繼而陪侍上東門院」とあつて、道長の北方倫子に寡居時代或は

それ以前から仕へてゐて、その女彰子の入内に際して引續いて奉仕したやうに説いてゐる。これは赤染衛門がさうであつた事實からの類推或は混同から生まれた説ではなからうか。なほ今一つ想起されるのは、既述同名異人の大貳三位についての錯誤を惹起させた榮華物語（殿上花見卷）の

内の御乳母の大貳の三位と聞ゆるは、殿のうへ鷹司殿の御乳母子なり。

といふ本文に於て、大貳三位が式部の女ならば、その母の式部は即ち倫子の官女でなければならぬとする説が簡易に成立しなかつたとも斷せられないではあるまいか。現に榮花物語抄の岡本保孝すら、

とのほ道長なり。とのうへたかつかさとは倫子也。さて大貳三位は紫式部の子なり。紫式部は倫子のめのとにあらず。日本史二百二十五、烈女紫式部傳にもそのよしみえず。此處誤寫にても有るにや。

と註してゐるほどであるからである。年齢からしても紫式部が倫子の乳母なぞで

あり得ないことは當然明瞭であるけれども、それ程に深く考へ到らない往昔の讀者には、單に倫子の女房といふ程度の想定は或は三位の關係から導き出されまいものでもないと思ふ。それは兎も角として、一は源氏物語にあまりに禁中生活が精寫されてあるので、上東門院に奉仕する前既に何處かで宮仕生活をした経験があつたのではあるまいかといふ想像からも、さうした傳説は助成せられる。童女としての宮仕説などの起る所以もこゝにある。けれどもそれらはいづれも確證がない。今はその問題は措いて、こゝではたゞ、在來の通説のやうに、この寡居時代に大作家源氏物語の筆が執られそめたらうといふ推定を、肯定するだけにして置く。殊に式部が出仕した翌寛弘五年には、もう相當禁中の皆に讀まれて評判となつてゐたやうであるから、筆を染めてゐたとして撞着はない。(なほ後に説くやうに、宮仕後に着筆したといふ古來の説もあるが、今日では用ゐられてゐない。)

紫式部が禁中に奉仕した頃は、道長の全盛時代で、従つて彰子中宮の御日常も

まことに御華やかなものでいらせられた。そしてそれに侍し奉るのは貴公子達と美しい侍女の群、すべて平和な豊麗な時代の波の中に多彩な行事と遊びの連続に日を送るより他に何の屈託もない樂園の大内山であつた。式部日記の後一條天皇御降誕の折の精しい記述にも、そのさながらの面影がうかがはれる通り、考へると夢のやうな美しい繪卷そのものであつた。

かうした雰圍氣の中に初めて入つて來た式部は、その眩しさ、めでたさにさぞや事新しく目をみはつたことであらう。そして暫くはさうした環境の中に今までの身の憂さを忘れる折もあつた。

憂き世の慰めには、かゝる御前をこそたづね參るべかりけれど、うつし心を

ばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘るゝにもかつはあやしき。(日記)

しかしやうやく新生活に慣れて來ると又、

なぞや、まして思ふこと(内心ノ苦惱)の、少しも斜なめなる(普通程度ノ)身な

らましかば、すきくしくも、もてなし若やぎて、常なき世をも過ぐしてまし。めでたき事面白き事を見聞くにつけても、たゞ思ひかけたりし心の、ひく方のみ強くて物憂く、思はずに歎かき事のまさるぞいと苦しき。いかで今はなほ物忘れしなむ、思ひがひもなし、罪も深うなど、明けたてば打詠めて、水鳥どもの思ふ事なげに遊びあへるを見る。

水鳥を水の上とやよそに見む我も浮きたる世を過ぐしつゝ、

かれもさこそ心を遣りて遊ぶと見ゆれど、身はいと苦しかなりと思ひよそへらる。(日記)

と、心の底に沈んで離れないわびしさと厭世觀とを、自分ながらもてあまして、若々しく華やかな空氣の中に何の思ひもなく浸り入つて面白く日を送りたい、しかしそれも出来ない自分を淋しく眺める彼女でもあつた。

はじめて内わたりを見るにも、物のあはれなれば、

身の憂さは心の中にしたひ来て今九重に思ひ亂る。(家集)

所詮宮廷の華やかさも、決して彼女を心の底から浮き立たせてはくれなかつた。

それのみか此の新しい樂士が又いつか勞苦の世界に變じて行つたのであつた。

彼女の新しい創作源氏物語はやがて禁中の誰彼に噴々ともてはやされ初め、左

衛門督公任に、「若紫やさぶらふ」と呼びかけられたり(寛弘五年十一月)、或は又

「源氏の物語おまへにあるを、殿(道長)の御覽じて」、(寛弘六年)「すき者と名に

し立てれば」と冗談半分の歌を詠みかけられたりした。かくて式部の名聲はいよ

いよ高く、いやでも人々の注目の的にならざるを得なくなつて來たのであつた。

そしてその博學多才は、一條天皇が源氏物語を側近者にお讀ませになつて御感歎

遊ばし、

この人は日本紀をこそ讀み給ふべはれ、まことにさえ(學才)あるべし。

と仰せられたので、人々から「日本紀の局」と綽名に呼ばれたと日記にあるので想像がつくし、又前掲(六〇頁)のやうに、中宮彰子に白氏文集の樂府二卷を御進講申し上げたことも書かれてある。しかし式部は、彼女の文才の譽れを妬む毒舌の同僚が、「男でも學問を鼻にかける者の出世したためしがない。まして女の」などと陰口をきくの、を耳にしてから、一といふ文字すら書けぬふりをし、屏風に貼つてある色紙の文字も讀めない顔をしてゐたといふくらゐに戒心してゐたので、樂府も「いと忍びて、人の侍はぬもののみま〜」に「御教へ申上げ、中宮も彼女の心をくんでそれをお隠し遊ばされてゐたとある。だがこれも、もしか洩れひろがつたらどんなに又謗られることだらうと思ふといやな氣がして、思はず「すべて世の中ことわざ繁く憂きもの」と歎息が出て來るのをどうしようもない。

いかばかり思ひぞしぬべき身を(下レホド高クトマツテキル管モナイ自分ヲ)、いといたう上ずめく(上藤ブル)かなと、云ひける人を

聞きて、

わりなしや人こそ人と云はざらめみづから身をや思ひ捨つべき

家集のこの歌も、畢竟、宮仕生活のうるささに詠んだのである。そして又この中に、式部の強い自負心と自信が感じられるではないか。

かうした悩みをせめて好きな讀書にでも忘れようと、一二冊引出すと、お前はかくおはすれば御幸ひは少きなり。なでふ(ナンデ)女が眞字書(漢字デ書カレタ本)は讀む。昔は經讀むをだに人は制しき。

と、もう又、女房達の口やかましき。自分一人得意顔をしてゐるやうに見られるいやさに、つひ

心にまかせつべき事をさへ、我が仕ふ人の目に憚り、心に慎む。まして人中にまじりては、言はましき事も持れど、いでや(言ツテモ仕方ガナイ。マア、

ヨサウ)と思ほえ、心うまじき(ワカツテクレナイ)人には、言ひて益なかるべし。物悟きうちし(難クセヲツケ)、我はと思へる人の前にては、うるさければ、物言ふ事も物憂く侍る。殊にいとしも物のかたぐ得たる人(何モカモニ達シテキル人)は難し。たゞ我が心の立てつる筋をとらへて、人をばなきになす(眼中ニ置カヌ)なめり。それ心より外の我が面影を恥づと見れど、えさらず(已ムナク)さし向ひまじり居たる事だにあり。しかくさへ悟かれしかたと、恥かしきにはあらねど、むつかし(一タトリアゲルノモ面倒)と思ひて、惚けられたる人に(放心シタヤウナウツソリ者ニ)、いとゞ成り果てて侍れば、

といふ態度を取るやうになるのである。

元來宮仕の當初から、彼女は學者の娘として、且文筆の女性として、清少納言式の高慢さを以て乗込んで來た人物と先入觀的に同輩達に思はれてゐて、その反

感と嫉視を買つてゐたと見られる節があることは、

いと艶に恥かしく、人に見えにくげに(アイソガナク)、そはくしき様して、物語好み、由めき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに、見おとさむものとなむ、皆人々言ひ思ひつゝ、憎みしを、

といふ日記の文でも想見出来る。然るに衆評を顧慮して、全然無能に近い「惚けられたる人」にならうと努めたので、

見るには、あやしきまでおいらかに(オツトリシテキテ)、こと人かとなむ覺ゆる。

と、會つてみてその温雅と謙讓に接して、これが評判のその人かと意外に思はれたり言はれたりしたと述懐して、すべては皆自分の性質だから仕方がないと淋しく自分をふりかへり、中宮の

「いと打解けては見えじとなむ思ひしかど、人よりけに(マサツテ)睦じう

なりにたるこそ」

と仰せられて、殊に式部に親しみと尊敬とを示して下さるのに無上の光榮を感じて、僅かに慰めを見出すのであった。

かうして自分の性質とはどうしてもピッタリしない、そして周囲の功利的な俗氣と調子を合せる苦勞の不愉快さ、式部の宮仕生活も、初めの希望を裏切つて、決して心愉しいものではなかつた。寧ろ厭世的な孤獨的な氣持を一層強めた結果に終つたのではなからうか。

身を思はずなる(心ニマカセヌ)と歎くことの、やう／＼なために、

ひたするのさまなるを思ひける

數ならぬ心に身をばまかせねど身にしたがつは心な

りけり (家集)

と悶え、或は

うきことを思ひ亂れて青柳のいとひさしくもなりに

けるかな (家集)

……思ひ出づれば、こよなく立ち馴れにけるも、疎ましの身の程やと覺ゆ。

(日記)

と禁中の生活をいとひながらも、思へば我ながら終に宮仕人になり了つたと自嘲に似たあきらめに己が姿をふり返つては、自分をいとほしむ心にもなるのであつたらう。

そして華麗な殿上社交生活の中にあつても、常に彼女の胸に去來するものは、

たゞ阿彌陀佛にたゆみなく經を習ひ侍らむ。世の厭はしき事は、すべてつゆ

ばかり心もとまらずなりにて侍れば、ひじりにならむに、懈怠けだすべうも侍ら

ず。(日記)

かうした遁世を願ふ心であつた。そして又常にそれを沮むのは

唯ひたみちに背きても、雲に上らぬ程（來迎ノ時即チ死ニ至ラヌ間）のたゆたふべきやうなむ侍るべからざる。それにやすらひ（逡巡スル）侍るなり。（日記）といふ遺された夫の忘れ形見の存在であつた。

式部が宮住の間、道長は彼女に對してかなりの關心を持つてゐたらしい。少くとも相當の容姿を有し、萬人に優れた文才の聞え高く、凡ての藝能を十二分以上に身につけた式部であり、特に自分の女彰子の侍女として擇んだくらのであるから、その女性に少からぬ關心なり興味なりを持たないといふ筈はない。日記を擴げると、屢々さうした記事が散見する。即ち寛弘五年の秋、中宮が御産の爲里第に下られた折、御供して土御門殿に居た或朝、式部が渡殿の戸口の局で庭を眺めてゐる所へ、几帳の上から顔を出した道長に、女郎花の一枝をさしつけられ、一首をと促されて筆を執り、
をみなへし盛りの色を見るからに露の分さける身こ

そ知らるれ

と認めたのに對し道長が、

白つゆは分きても置かじ女郎花心からにや色のそむ

らむ

と書いて與へたと見えてゐるのが初めて、（この贈答は家集にも載つてゐる。）十一月朔の敦成親王（後一條天皇）の御五十日の御祝の夜、酒に酔つた道長が宰相の君と二人居るところをつかまへて、歌を詠まねばゆるさぬと責め立てたことや、又十一月二十一日五節の舞姫の試演に、あまり氣がす、ます部屋に残つてゐると、道長がやつて来て、「などて、かうて過ぐしては居たる。いざ諸共に」と引立てて連れて行かれたこともあつた。寛弘六年の條には、前にも觸れたやうに、

源氏の物語、お前にあるを殿の御覽じて、例のすゞろごとく（ジャウダンロ）ども出で來たるついでに、梅の枝に敷かれたる紙に書かせ給へる

すき者(好色ト酸キニ掛ケタ)と名にし立てれば見る人の
折らですぐるはあらじとぞ思ふ

賜はせければ、

人にまだ折られぬものを誰かこのすき者ぞとは口
ならしけむ。

めざましう(驚キマシタ)と聞ゆ。

と、いよ／＼馴れた道長に擲掬されたのを巧に外したと、そしてそれに續けた
文に例の

渡殿に寝たる夜、戸を叩く人ありと聞けど、恐しさに、音もせで明したるつ
とめて(翌朝)

よもすがらくひなよりけに(以上ニ)なく／＼ぞ横の
戸口を叩きわびつる

かへし

たゞならじとばかり叩くくひなゆゑあけてはいか
にくやしからまし

といふ問題の一節があり、更に寛弘七年の正月二日の條には、中宮の御前に侍し
てゐると、道長が又いつものやうに微醺をおびてやつて來たので、

煩はしと思ひて隠るへ居たるに、「など御父(中宮の父で、道長自身を指す)の御
まへの御遊びに召しつるに侍はで、急ぎまかでにける。僻みたり」などむつ
からせ給へる。さるは「歌一つ仕うまつれ、親のかはりに。初子はつねの日なり。

詠め／＼と責めさせ給ふ。

とも記されてゐる。式部が自身の日記にかうした事を記しとめてゐるのは、一世
を壓し、萬人羨仰の的たる道長に、このやうに親しみを持たれ、猶戸口まで叩か
せた事が、女性の身として、さすがに嬉しくないことはなかつたからであらう。

そしてさうした道長にすらもたやすく折られぬ自分の弱い強さに、淋しさと共に誇と満足とを覚えるからでもあらう。そして又いつも自分につき纏つて、自分を第三者として眺めるもう一人の自分に對して——併せて自分以外の人の目に對して——の、小さな要領であり又辯明でもあつたらう。兎に角當時の女性の凡そ悉くが、若し道長にかういふ態度を以て臨まれたら、恐らく女性としての誇らしさを感じつゝ、受容れるかもしれないとは、式部自身よく知つてゐたであらう。とすれば、自身をも含めてさうした女性達へ示した彼女の皮肉もあつたかも知れない。

以上のやうな道長との交渉が、後世式部を傳する人々の間に、事實の有無についての肯否兩論をひろげて、終に道長の妻であつたといふ説（河海抄）も出て來るところとなつた。しかし彼女の記述以上には何等根據のない臆説で、それは單にあの時代の一般風潮と、源氏物語といふ戀愛小説の作家であるくらゐだからとの

皮相な所見とを前提にして、この文名を一世にたゞへられた才女と、その主家たる一世の權勢人道長との對照が、異常な興味を何人にも與へるところから來たものであらう。

かくして式部の宮仕は何年頃まで續いたのであらうか。外觀の華麗の裏に交らひの煩苦の厭はしい禁中生活が決して自分の性情に合つたものではないことを知りつくしてゐながら、中宮の御信賴を蒙り、一女はなほ幼し、いろ／＼の事情から宿望の出家すらも遂げられず、ずつと後まで宮仕を續けて居たのではあるまいか。源氏物語若菜上卷に、女三宮の侍女等のことを、

女房なども大人々々しきは少く、若やかなるかたち人（麗人）の、ひたぶるに打ち花やぎ、ざればめるはいと多く、數知らぬまで集ひ侍ひつゝ、物思ひなげなる御あたりとはいひながら、何事ものどやかに心しづめたるは、心の中のあらはにしも見えぬわざなれば、身に人知れぬ思ひ添ひたらむも、又ま

ことに心地ゆきげに、と、こほりなかるべきにしも打ちまじれば、かたへの
人にひかれつゝ、同じけはひもてなしになだらかなるを、

と書いてあるその敘述の中から、作者の宮仕の體驗と心境との或姿を読み得られ
るやうに感ずる。寛弘八年六月二十二日、一條天皇が崩御遊ばされた後、中宮彰
子に従つて枇杷殿に移つたことは、榮華物語(岩陰卷)に見え、その條には「藤式
部」として、

ありし世は夢に見なして涙さへとまらぬ宿ぞ悲しか
りける

といふ紫式部の歌が載せられてあり、又次の日蔭のかづらの卷にも、長和元年の
正月司召の頃に、一條天皇御在世當時の盛時を偲ぶ式部の

雲の上を雲のよそにて思ひやる月は變らず天の下に
て

の詠が出てゐるので、當然この頃は彰子(同年二月皇太后。正月まではなほ中宮。)に
奉仕してゐた事がわかる。なほ本朝世紀長和二年五月二十五日の條に、皇太后宮
の女房を「越後守爲時女」としてあり、且これまで常に此の女房が御取次をした
と見えてゐる事實を、その時までは確實に宮仕した證左とすべきであると、石村
氏も指摘されてゐる。

既に掲げた家集乃至千載集所收の、兄惟規の死を悼んだと推定し得られる式部
の歌(一九頁参照)の詠まれたのは、父が越後の任を辭して歸京した際でなければ
ならぬであらうから、恐らくそれは長和三年の秋と見ねばなるまいし、宮仕の繼
續の如何は不明であるとしても、その頃までは確かに生きてゐた筈である。(爲
時が越後守に赴任したのは辨官補任によると寛弘八年二月一日であるから、國司
の任期四年を果したのなら、長和四年の春の縣召で交替するのが順序であるけれ
ども、小右記の長和三年六月十七日に越後守爲時辭退狀のことが見えてゐるから、

任期の満ちるを待たずして辭任したことが知られる。これも惟規の死に關係があるのではあるまいか。

これも前に引用した榮華物語（楚王の夢卷）の後冷泉天皇御誕生の萬壽二年八月の條、

大宮の御方の紫式部が女の越後の辨云々。（三〇頁参照）。

とある彼の記事を、安藤爲章は紫家七論の系圖に引いて、

この書きさまを思ふに、紫式部も萬壽二年頃は猶存生にて、大宮に侍りしと見ゆ。

と論じてゐるが、上東門院に長く御仕へしてゐた紫式部を亡きあとでも「大宮の御方の」と書いても、さして不自然ではないし、その意味での存生の舉證としては不十分であるやうに思はれる。更に爲章は又、同物語（殿上の花見卷）の長元四年九月、上東門院住吉詣供奉の侍女連名の中に、「大貳三位・辨の乳母」は見えて

ゐる（これも既に前に觸れたところである。三三頁参照）に對して、「母の式部が名は見えず。つゝがななくば、必ず參るべきもののやうに覺ゆ」と述べて、支障でもあつたのでない限り、長元四年までに式部は既に歿してゐるのではないかと推定してゐる。こゝに式部の女として右二人の名を爲章が擧げてゐるのが誤であることは重ねて説かぬが（同上頁参照）、母式部の歿年をこの頃までの内かと疑つたのは當つてゐる。

又同じく榮華物語（衣の珠卷）に、萬壽三年正月十九日、上東門院御落飾の時、（この時彰子は太皇太后で、御出家と共に院號の宣旨があつた。）御供して出家した女房達の名が擧げられてゐる中に、紫式部の見出されないのを有力な資料として、石村貞吉氏が論證されてゐるやうに、若し式部が宮仕してゐたのなら、當然に御供しない筈がないから、この頃は既に式部は出家又は死歿してゐたものと考へてよいであらう。いづれにせよ、少くとも宮仕人をなかつたことだけは想定出

來るのである。新古今集(雜上)に、「上東門院世をそむき給ひにける春、庭の紅梅を見侍りて」と詞書した大貳三位の

梅の花なに匂ふらむ見る人の色をも香をもわすれぬ
る世に

といふ歌が載つてゐるが、紫式部のさうした歌は何にも傳はつてゐないのも、助證の二になり得るであらう。

以上の諸説を綜合してみると、式部は長和二年五月までは宮仕をしてゐたが、その後罷めて、萬壽三年正月までの間に出家か死歿かしてゐるのではあるまいかといふ事になる。今一つ式部の歿年について、與謝野晶子氏の推定として、父の爲時が長和五年四月二十九日に園城寺で出家した動機を、惟規と式部と二人の子を失つたことに起因してゐると推測し、これによつて式部は同年の春歿したと見られ、且長和五年以後の作とおぼしい歌が一つも歌集に見當らないのが、それを

裏書きするといふ意見が提示せられてゐるのは、主觀に偏する傾きはあるが、注目すべき新見といふべきであらう。

要するに、式部の死は長和四年の内か、或は五年初か(少くとも四月二十九日以前)であつたかと想定される。(後に引く家集の「垣根荒れ」「花すゝき葉分の露や」等の詠(一五二頁参照)は、病床の作とは見られ得るけれども、必ずしも死の迫つた頃のものとも斷せられず、他の時の病中吟かも知れないから、その詞書に前者は「六月ばかり常夏の花を見て」及び後者は「物や思ふと人の問ひ給へる返り事、九月つごもり」とあるのを、直ちに死歿年時の考證資料に當てるのは差控へる。)

なほ河海抄(卷一、料簡)に、紫式部の舊跡及び墓所に關して傳へるところ左の如くである。先づ

舊跡は正親町以南、京極の西頬、今東北院の向也。此院は上東門院御所の跡

也。

とあり、次に

式部の墓所在ニ雲林院白毫院南。小野篁が墓の西なり。宇治の寶藏の日記にも、紫野雲林院にあるよし見えたり。雲林院は淳和の離宮也。賢木卷に、光源氏雲林院にて六十卷といふ文とかせて聞き給ひし所なり。式部は檀那院贈僧正の許可を蒙りて、天台一心三觀の血脈に入れり。かねてより、雲林院の幽閑を思ひしめけるも、旁々故あるにや。

と見え、少異はあるが後代の諸抄も多くこれを引掲してゐる。東北院は拾芥抄にも「一條南、京極東、上東門院御所云々」と見えて居り、又紫野雲林院は大鏡の冒頭にも出てゐて有名である。

紫式部の名

紫式部といふのは無論宮廷の呼名で、彼女の本名は全然傳はつてゐない。そして宮仕当初は藤式部の名で召されたらしく、榮華物語の初花卷・岩陰卷・日蔭葛卷には即ち藤式部とあり、すつと後卷の楚王の夢卷になると紫式部と記されてある。藤式部の藤は、姓の藤原氏の略稱であること、清原元輔の女であつた清少納言、赤染時用の女であつた赤染衛門の場合と同様で、當時の一般慣行として當然である。紫式部の名は伊勢大輔集の詞書にも二箇所ほど見え、勅撰集にもすべて紫式部で出て居り、その他後世のものには、いづれも紫式部の名で傳へられてゐる。紫式部と改められた理由については、古來いろいろに云はれてゐるが、それ

らを総合してみると、大體三通りの説が行はれてゐるやうである。即ちその一は源氏物語に關聯してゐるもので、

(イ) 紫上の事を勝れて描出した爲(紫明抄系圖・河海抄、料簡)

(ロ) 若紫卷の描寫が勝れてゐた爲(袋草子、卷四)
の二つの他、無名草子に

いまだ宮仕もせで里に侍りける時、かゝる物(源氏物語)作り出でたりけるに
よりて、召し出でられて、それゆゑ紫式部といふ名はつけたちとも申すは……

といふ説も擧げられてゐて、これは或は右のいづれかに歸するものであるかも知れないが、若し初から紫式部と呼ばれたといふ意味なら、藤式部説と一致しないことになるけれども、後の改名の由來が溯つて源氏の創作に關聯してであつたといふのなら、撞着から救はれるわけである。その二は、同じく河海抄に、藤式部

の名は幽玄でないといふので、「藤の花の色のゆかりに、紫の字にあらためらる」と云々(清輔朝臣の説也)」と記されてゐるのがそれで、三には、一條院の御乳母子である爲、上東門院へ進らせられるとて、「我がゆかりの者故、あはれと思召せ」との御言葉があつたからとの由が袋草子(河海抄にも引載)に述べられてゐて、「武藏野の義也」と附言してあるが、それは古今集(雜上)の「紫の一本故に武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」の心を意味するのであらう。

しかしいづれも確説とは斷じ難く、唯その中では第一説の源氏物語に因む名といふのが一番自然さを有つてゐるのではないかと思はれる。紫式部日記にも、公任卿が「あなかしこ、この邊りに若紫や侍ふ」とたはむれたことが書かれてゐるし、稍後の更級日記にも、源氏物語を「紫の物語」とも呼んでゐるし、あまりにも有名になつた源氏物語、殊に理想の婦人として描かれた女主人公、源氏の室家紫上(若紫卷はその生ひ立ちぶりが書かれてある卷であるから、結局(イ)と

(ロ)とは本は多分同一の説と思はれる。)が、人々の話題的となつてもそれはやされたであらうことは想像に難くないから、恐らくかうした事由から誰云ふとなつた一つの讚稱として作者の名に女主人公の名を移して呼ぶやうになり、宮中の召名としても紫式部で通るやうになつたのではあるまいか。それに紫が藤の花のゆかりの色であれば、なほ更、藤式部の藤が紫にかへられても、不自然さは感じられない。(勿論、藤では幽玄ではないからなどいふのは後世的附會説であらう。)今直ちにこの説が正しいと決めることは出来ないが、他の諸説に比して妥當さが一番大きいやうに思はれる。七論の爲章など、「若紫や侍ふ」の記事を以て、第一説の(イ)説肯定の無二の舉證とさへしてゐるが、それだけで斷定するのは少しく早計の嫌があらう。又第三説は本居宣長もそれに左祖してゐる一人であるが、彼も疑つてゐるやうに、式部の母が一條天皇の御乳母であつたかどうか確證がないので、その點頗る根據脆弱たるを免れず、萩原廣道もその著源氏物語評釋では

この説を採らず、又若し紫式部の名を陛下から賜はつたとしたら、紫上に自身が擬せられたことになるから、用意深き彼女として必ず謙遜辭退するに違ひないとし、人々からの渾名がやがて呼名になつたものであらうと論じてゐる。

要するに、當時の女房名が姓氏と父兄の官名とから來てゐるのが一般であつた中で、獨りかゝる名で呼ばれたのを異數とすべく、こゝにも名篇源氏物語の創作に關聯しての彼女の盛名とその特異の存在とが語られてゐるのが注目される。

次に説くべきは式部といふ名の因由である。これは昔からあまり問題にされてゐず、紫女傳研究の權威爲章すらも穿鑿を試みてゐない。普通兄式部丞の官名から來たと云はれる説が行はれてゐるが、これは紫式部日記に「この式部丞といふ人の」と兄惟規の官名を記してゐるのから出た推定である。この他の説ではたゞ漠然と父爲時又は夫宣孝の官名から來たかも知れないといふ程度である。元來女房名は大抵の場合、父か夫か或はこれに准する者の姓氏と官名に因るものが多い

ことは既に言及した通りであるが、彼女の場合のこの式部は誰の官名から来たものであろうか。兄の官名から来たとすれば、最も都合よいわけであるけれども、實は彼女が官仕に上つた當時、惟規はまだ兵部丞であつたことが御堂關白記によつて明證を得られる。式部丞になつたのは寛弘六年以後、少くとも五年七月以後で（日記中「式部丞」の名の見える記事は、例の消息文と稱せられる部分で、これは寛弘七年三月以後同九年以前の執筆と推定される。）あるから、藤式部の名の以前に別の召名があつて、兄が式部丞に任じてから妹も藤式部に改められたとでも假想しない限り、惟規の官名に因つたとする在來の説は成立しないことになる。然らば父の官名は如何といふと、爲時は小右記によれば永觀二年十一月には式部丞であつたこと確實で、それから藏人の兼官となり、寛和二年には式部大丞になつてゐる。又夫宣孝には式部といふ官名は見當らない。以上の點からして、父爲時の舊官名に因んで名づけられたとすれば矛盾はない。何故に現官名或は最近の

前官名を以てせられなかつたかの事情は分明することは出来ないが（或は同名の他の女房でもあつたのかも知れない）、兎に角式部の名が近親者の官名によつたものとするならば、兄のでも夫のでもなく、父の官名であつたと見るのが最も穩當と思はれる。（詳細は拙著源氏物語新考の「紫式部名義小考」に論述してあるから、こゝには簡略にとどめる。）

交 友

前に述べた如く、紫式部は宮仕に上つてゐた間でも、他の女房達のやうに華やかな雰圍氣の中に満足を得、喜びを迎へるといつた性質ではなくて、いつも自分一人を淋しく見守り、禁中生活の華やかさに寧ろ重壓をさへ感じてゐるほどの非社交的な女性であるから、そして他の人々からも、「いやに容體ぶつたすまじやで、親しみがなくつんとしてゐて、本ばかり好きで學者ぶつて居り、何かといふとすぐ歌を詠んでは高慢ちきな顔をして、癪にさはるほど自分一人偉がつて憎らしい人」と先入見的に想定されて、悪口を言はれたと日記に記してゐるくらゐであるから(七一頁原文参照)、打解けた友人といふのも、自分からもあまり求めない

し、文出来もしなかつたのではあるまいか。この點、清少納言とは全然反對で、清女が、寧ろ學問を鼻にかけて自慢やであるにかゝはらず、それほど人から憎まれたやうでもなく、男性の友人まで多かつたやうに枕草子などに見えるのは、清女の性質が社交的で、若々しく、そして卒直快活で、心の中に沈滞した重い暗さを有つてゐないからで、常に人々に明朗な親しみを感じさせるのであらう。これに對して紫女の方は、極めて内省的で、謙抑的で、用心深く、無口であるのが親しみを持ってない印象を先づ他人に與へることになるのであるに違ひない。

しかし一度親しくなつた人には、「この人がと驚くほど濃厚で、噂とは別人の感がある」と言はれたといふのであるから、俗に言ふ人づきの悪い人だつたと想像される。しかも「いと打解けては云々」と仰せられた中宮彰子の御言葉(七一頁参照)によつてもわかるやうに、式部の人間的深みをよく知つた人々は、眞實の親しみを持つやうになつたことは疑ふべくもない。

式部にとつて最も心からの親友であつたと思はれる一人は、式部日記に屢々名前の見える小少將である。同じく上東門院に仕へてゐた女房であるが、式部はこの小少將が非常に好きで、二人は殆ど同性愛とも見られるほど、互に姉妹のやうに睦み合つてゐたらしい。

小少將の君は、そこはかとなくあてに（上品ニ）なまめかしう、二月ばかりの垂柳のさましたり。容體いと美しげに、もてなし心にくく、心ばへなども、我が心とは思ひとる方もなきやうに物づつみし、いと世を恥ぢらひ、あまり見苦しきまで兒めい給へり。腹立たなき人の、悪しざまにもてなし、言ひつくる（言ヒナス）。人あらば、やがてそれに思ひ入りて、身をも失ひつべく、あえかに（キヤシヤデ）わりなき所つい給へるぞ、あまりうしろめだけなる。（日記）

とは式部の彼女に對する觀察である。おとなしくて、素直で可愛らしい人柄が、

無性に式部の心をひきつけたのであらう。丁度源氏物語に出て来る夕顔上のやうな性質の人らしく、若しかしたら小少將がそのモデルではなかつたかと想像したいくらゐである。そして右の容姿は恰も源語中では、女三宮を評して、

人よりけに（格段ニ）小さく美しげにて、唯御衣のみある心地す。匂ひやかなる方は後れて、唯いとあてやかにをかしく、二月の中の十日ばかりの青柳の、僅にしたり始めたらむ心地して、鶯の羽風にも亂れぬべくあえかに見え給ふ。（若菜下巻）

とある描寫にそのまゝを見出すのは、即ちこの人の容姿を作者が自作小説中の人物に借りた證左となるから、性情の方は夕顔上の性格構成の素材に用ゐられることも十分にあり得ることと言へる。式部がこの女性に特に親しんだのは、一つには小少將の境遇の薄倅なのがさうさせたらしく、

大方の世の有様、小少將の君のいとあてにをかしげにて、世を憂しと思ひし

ひて居給へるを見侍るなり。父君より事始まりて、人の程よりは、幸ひのこ
よなく後れ給へるなめりかし。(日記)

といふやうに共感し同情してゐる。そしてこれも亦夕顔上の境遇と矛盾しない。
式部日記によれば、小少將は後一條天皇御降誕の際御湯殿の儀に御佩刀みはかしの役を
勤めた由が見え、式部とは常に手紙の往復をして、時雨の降つた日に取交した歌
も出て居り、又弘徽殿の細殿の三の口に式部が臥してゐる所へ小少將が來たのを
待ち受けて、宮仕の氣苦勞を語り合ひつゝ、疎むやうな今宵の寒さを啣つた夜も
あれば、二人が一緒に髪を梳つた曉もある。平生、

二人の局を一つに合はせて、かたみに(交互ニ)里なる程も住む。一たびに
参りては、几帳ばかりを隔てにてあり。

といふやうに部屋も一緒に使ふ共同生活をしてゐたのである。かうしてあまり仲
がよすぎるので、二宮(一條天皇第三皇子敦良親王、後朱雀天皇)の御五十日の朝も、

前後して里から参つた二人が、いつものやうに同じ局に居る所へ道長が來會はせ
て、「お互に知らぬ他人に誘惑されぬやう、警戒せぬと」と冗談を言ひかけたの
を、式部は

されど誰も(二人トモ互ニ)さるうとくしきことなければ、心安くてなむ。

と信じ合つてゐる友情から、それを笑殺したのであつた。日記だけでなく家集に
も、小少將と共に水雞を聞いた夕の贈答もあれば、土御門殿の三十講の折、やり
水の景色を眺めやりながら、式部が

影みても憂き我が涙落ち添ひてかごとがましき瀧の

音かな

と詠じたのに、小少將が

獨りて涙ぐみける水の面に浮き添はるらむ影やいつ
れと

と同じ心に慰め合ひ、又

なべて世の憂きに泣かる、あやめ草今日までかゝる
ねはいかゞみる

かへし

何事とあやめは分かで今日もなほ袂に餘るねこそ絶
えせね

と、いつの時でもお互に同感者であり、同情者であり、共に涙し、共に慰めるよ
き親友同志であつた。

その小少將の死は、式部にとつてどのくらゐ精神的衝動を與へられたことであ
らう。夫宜孝に死別した不幸と併せ重ねて、如何に深い淋しさ悲しさを経験した
ことであらう。家集に、亡き人の文を見つけ出して涙を新にし、やはり僚輩の加
賀少納言へ詠んで贈つた歌が載つてゐる。

小少將の君の書き給へる打解け文の、物の中なるを見つけて、加賀

少納言の許に

暮れぬ間の身をば思はで人の世の衰れを知るぞかつ
は悲しき

誰か世にながらべてみむ書きとめし跡は消えせぬ形
見なれども

これに對して少納言も

亡き人をしのぶることもしつまでぞ今日のあはれは
あすの我が身を

と返歌してゐる。これは寛弘七年正月十五日（二宮御五十日）以後のことである
ことだけは確である。（即ちその御祝の當日までは小少將は存生であつたこと、
前述日記の記事で明瞭であり、そして日記は此の日の記事までで後が無い。）

小少將の他に、宮仕以前に式部の心友だったと思はれる人がもう一人居たらし、
いのは、家集に、

姉なりし人亡くなり、又人のおとうと(妹)失ひたるが、かたみに行
き會ひて、亡きが代りに思ひかはさむと言ひけり。文の上に姉君と
書き、中の君と書き通はしけるが、おのがじし遠き所へ行き別るゝ
に、よそながら別れを惜しみて、

北へ行く雁のつばさに言づてよ雲のうはがきかきた
えずして

返しは西の海の人なり

行きめぐり誰も都にかへる山いつはたと聞くほどの
はるけさ

とあつて、姉と妹を失つた同志が、互に姉妹の約束をして手紙にも書き交したと

してある。名前は誰と分らないが、式部が父に伴はれて越前へ旅したと同じ頃の
交遊であつたことは前にも觸れた。(四八頁参照)

又その筑紫へ行つた友達と續いて文通をしてゐた歌の贈答も載つてゐて、これ
は玉鬘巻に筑紫を背景とした物語を書いてあるその素材に寄與してゐることは、
「逢ひみむと思ふ心は松浦なる云々」といふその唱和の二首と、同巻の大夫監と
乳母との贈答とを對比すれば、直ちに首肯出来るのである。

その他では、宮仕時代に小少將に次いで、大納言の君(源遍子)と親しいことが
日記や家集で知られるが、日記には又例の、同僚の人々の名を擧げて、一々にそ
の容姿や性質について短評を加へた部分が含まれてゐて、それらをも通して観る
と、その大納言の君や宰相の君、宣旨の君、辨の宰相の君など、おとなしい、も
の静かな、或は可憐な人が一體に好きだつたらしい。小少將の君も勿論同じ好みに
合致する女性である。

「いにしへの奈良の都の八重櫻」の歌で殊に有名な伊勢大輔とも相當親しかつたやうである。それは丁度同じ上東門院の女房であつたからでもあるが（日記にも「大輔伊勢の祭主輔親が姫」と出てゐる。）、特に面白い因縁は、伊勢大輔集に

女院（上東門院）の中宮と申しける時、内におはしまいに、奈良から僧都の八重櫻を参らせたるに、今年のとまり入れ人は今参りぞとて、紫式部のゆづりしに、入道殿（道長）聞かせ給ひて、たゞには取れぬものをと仰せられしかばと詞書して、その「いにしへの」の歌が出てゐることで、即ち宮仕の先輩としての紫式部が新参の大輔に御取次を譲つたことが、かの「今日九重に匂ひぬるかな」の名歌を生んだ機因をなしてゐるのである。かうした事などからも、今参りの大輔が式部に好感と敬意とを有ち、そして宮仕生活に於けるよき導き手として信頼しようとしたらうことが想察される。更に同集には二人が清水に参籠した時の詠として、

紫式部清水に籠りたりしに参りあひて、院（上東門院）の御料に諸

共に御あかし奉りしをみて、櫛の葉に書きておこせたりし

心ざし君がかゝぐる燈火のおなじ光にあふが嬉しさ

かへし

いにしへの契も嬉し君がためおなじ光に影を並べて

松に雪のこほりたりしにつけて同じ人

奥山の松ばに氷る雪よりも我が身まにふる程ぞはか

なき

返し

消えやすき露の命に比ぶればげにとゞこほる松の雪

かな

といふ贈答歌も見えてゐる。そして後の二首、特に「奥山の」の方は源氏物語の

椎本卷に稍變へられて採られてゐる。

和泉式部も同じ上東門院に奉仕した僚輩の一人で、日記に

和泉式部といふ人こそ、面白う書き交しけれ云々。

と記してその歌才を述べてゐるが、結語に「恥ぢかしげの歌よみやとは覺え侍らず」と斷案を下してゐるのから推すと、内心には輕蔑してゐたのではあるまいか。それと並べて評してある赤染衛門も亦先輩格の同僚で、これも平凡視してはゐるが、和泉式部に對するよりは比較的穩やかな批評ぶりであるところをみると、そのおとなしい人柄に相當好意を感じてゐたのであらう。

ついでにこれは同僚ではないが、そして又直接どの程度交友關係があつたかも明確ではないが、略同時代の人、そして皇后宮定子に仕へて才名高い競争相手たる清少納言について、彼女は和泉・赤染を評した後に特につけ加へて、

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかり賢さかしだち眞字まんな（漢

字）書き散らして侍る程も、よく見ればまだいと堪へぬごと多かり。かく人に異ならむと思ひ好める人は、必ず見劣りし、行く末うたてのみ侍れば、艶えんになりぬる人は、いと凄すこう、すゞろなる折も、ものの哀れに進み、をかしき（興趣アル）ことも見過ぐさぬ程に、自らおのづかさるまじく、あだなる様にもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人の果て、いかでかよく侍らむ。

と、痛烈に貶罵してゐるのは、紫・清兩女の性格の相違を現してゐて、頗る面白い。又日記には大齋院に仕へる中將の君（恐らくは兄惟規の愛人）についても、その手紙を見て、

いとこそ艶えんに、我のみ世にはもののゆゑ知り、心深き類ひはあらし、すべて世の人は、心も肝もなきやうに思ひて侍るべかめる、見侍りしに、すゞろに心やましよう（不愉快デ）、おほやけばら（公憤）とか、よからぬ人の言ふやうに、憎くこそ思ひ給へられしか。

と憤懣を洩らして、自分が奉仕する門院方女房達の才學に關して、此の齋院への對抗意識を強調すると共に、我は顔の慢心を憎惡する點では、清少納言に對してと共通なものを示してゐる。

兎に角、これらの評言を通しての式部は相當の皮肉やで、競争者に對しては激しい意識的な反抗感を持つてゐたやうである。居常の表面の言動にはそれを出さず、努めて黙してゐるだけに、内心に燃える力は却つて強かつたのであらう。それが自然かうした形をとつて日記乃至消息文の中に現れたものと考へられる。

始にも言つた通り、清少納言には、彼女を取巻く親しい男性の友人といふものが相當多く居たらしく、一番仲の良い行成及び齊信・公任といつた所謂四納言の人々や、いもうとせうとの關係にあつたと枕草子に書かれてゐる修理亮橘則光などと特に親しく、この他源少將經房はじめ十指に餘る程居たと思はれる。それに比べて紫式部には男性の友人といふものは殆どなく、勿論公任も行成も式部に對し

て相當關心を有ち、尊敬を拂つて居り、「若紫や侍ふ」のやうに、時折何か言ひかけられることもあつたらしいが、特別に親しく言葉を交す異性の友人といふのではない。強ひて一番近い男性を挙げれば、道長であらうが、これは友人並には數へられないし、且その交渉も既に述べたやうな程度に過ぎないものであつた。家集にも夫宣孝以外に男性と取交したらしい歌は見當らない。かうしたところにも、此の時代には珍しいほどの式部の性格が窺はれる。

創作

源氏物語

源氏物語の創作年時に關しては、紫式部が結婚生活兩三年にして夫宜孝に死別した後、遺兒（大貳三位）を育てつゝ、寡居の孤獨のつれづれに筆を執つたとするのと、寛弘四年上東門院奉仕後に着手したとするのと兩説ある。既に古く無名草子などにも、兩説を並出して「いづれかまことにて侍らむ」としてゐる。そしてその宮仕以前説の方には、召出された機因と紫式部の召名の來由とが併せ説かれてゐるのは既に引掲した通りであるが（八八頁参照）、寡居時代（長保三年から寛弘四年まで七年ぐらゐの間）に五十四帖の全部が完成されたと強ひて定めるに及ばない上

に、宮仕後の體驗や事件が、その素材に供せられた確證を數々擧げることすら出来るから（拙著源氏物語新考「源氏物語論考」参照）、着筆は寡居時代でも、完成は宮仕後であつたものと見たい。いづれにせよ、寛弘五年には少くとも既に若紫卷が出來てゐたことは、前にも屢々引いた日記の同年十一月朔の御祝の條に、公任卿が「若紫や侍ふ」と探しまはつたのに對して、

源氏にかゝるべき人見え給はぬに、彼のうへはまいていかでものし給はむと聞きあたり。

と自記してゐるので明白である。「彼のうへ」といふのは紫上のことであるが、若紫卷まではまだ事實は上即ち源氏の北方ではないから、更に後々の卷まで書かれてゐる證左とも考へられぬことはないが、數年後に回想的に記されたのであつたとすれば、矛盾ではない。要するにその頃までに源氏物語は既に少くとも一部は成つて居り、且人々の間に大にもはやされてゐたことは肯定されねばなら

ない。同じ日記の同年同月、中宮が冊子をお作らせになる條に、

局に、物語の本ども取りにやりて隠し置きたるを、(自分方中宮ノ)御前にある程に、(道長ガ)やをらおはしまして、あきらせ給ひて、皆内侍のかんの殿(中宮ノ御妹研子)に奉り給ひてけり。よろしう書き換へたりしは皆引き失ひて、心もとなき名をぞ取り侍りけむかし。

と記してあるが、この「物語の本」といふのを、式部が源氏を書く以前に習作した短篇小説を指すのだといふ想像説も成り立ち得るけれども、亦これは源氏物語の原稿を指したのもかも知れない。それから又、一條天皇が「源氏の物語」を誰かにお讀ませになつて聞召したといふことも書かれてゐるし、(尤もこれは寛弘六年の部分に紛れ込んだ消息文の中であるから確な年代は分らないが)寛弘六年に、「源氏の物語」が中宮の御前にあつたのを道長が見て、「すきものと名にし立てれば」と戯れた(七六頁参照)とも書かれてあるから、いよ／＼この頃には相當に先の方まで書

かれてあつたと考へてもよいであらう。

宮仕後の着手説としては最も通俗に流布した傳説がある。即ち大齋院(選子内親王)から珍しい物語を見たいとの御懇望があつた爲、上東門院が紫式部に御下命になつたので、源氏物語を書くことになり、祈願の爲石山寺に參籠し、折節湖水にうつる八月十五夜の満月の光を眺めながら、ふと浮んだ構想を、そのまま筆を執つて机上の大般若經の裏面に書いたのが須磨・明石の巻で、この二巻が先に出來て後、前々の巻を書いたのであるといふ有名な逸話で、河海抄に載する所であり(無名草子のも同じ本源から出たと思はれる)、江州の石山寺には、今以て紫式部が源氏物語を認めたといふ「源氏の聞」といふのさへ現存してゐて、北村季吟は源氏物語の註釋を集成するに當つて、その題號をこの傳説から採つて「湖月抄」と名づけたくらゐに、永く事實として信奉せられてゐる傳説である。けれどもその確實性が乏しい爲に、現時では殆ど顧みられない。なほ他に源高明の左遷

に同情して執筆したといふのや、父の爲時が構案したものを書かせたとか、或は道長が加筆したとか、信じ難い臆説がいろいろ傳へられてゐる。

源氏物語は、主人公光源氏を中心とした正篇とも云ふべき部分の四十四帖（嚴密に言へば終の三帖は續篇との繋ぎである。）と、その續篇とも云ふべき薫と匂宮を中心とした普通に宇治十帖と呼ばれる卷々々から構成されてゐる。但し五十四帖といふのは、卷名のみあつて、本文のない雲隱卷をも一卷に數へ、その場合若菜上下卷を一卷にみるので、さなくば雲隱卷を數へずに若菜を二卷とする數へ方である。更級日記に「五十^{まき}卷」とあるのは「餘」でも分るが、必ずや五十四卷のことで、更級日記の著者が讀んだ治安元年には恐らく源氏全卷が完成してゐたに違ひないことは、その更級日記中に浮舟のことが書かれてゐるのでも大略推斷出来る。

源氏物語の卷々には、桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫など、それ／＼優美な名

が附せられてゐる。そして若紫と末摘花、葵と賢木、紅葉賀と花宴、須磨と明石のやうに、對偶的な稱呼の附せられた卷々もある。これらの卷名は恐らく作者自身の命名であらうことは、公任卿が「若紫や云々」と呼びかけたのでも想像が可能である。若紫卷の本文には「若紫」の語は見出されないからである。尤も卷名の一名（桐壺を壺前裁といふ如き）には後人の附したのもあらう。

今、極めて簡単に物語の筋だけを述べて置かう。

幼くして母を失つた光源氏君は、輝く美貌と勝れた才能によつて一世の光と讃へられ、左大臣の女葵上と結婚したが（桐壺卷）、一子夕霧を遺して先立たれ（葵卷）、その後紫上といふこれも才色兼備の理想女性を妻に得て幸福であつたが（若紫・紅葉賀・葵卷）、御父桐壺院崩御の後源氏をそねむ人々の壓迫を受けて（賢木卷）、須磨浦に自ら身を退き、三年の間蟄居してゐる内（須磨・明石卷）、めぐり來る春に再び逢うて、いやます權榮の身の上となつた。その間に明石上を得て二人の間に

恵まれた明石姫(濡標卷)は、成長して後に東宮妃として入内されることとなつた(藤裏葉卷)。これより前、太政大臣に昇つた源氏は、宏壯華麗な六條院を造り紫上以下と移り住み(少女卷)、太上天皇に准せられて幸運の絶頂にあつた(藤裏葉卷)。源氏は御兄朱雀院の御懇望によつて姫宮の女三宮を迎へられたが(若菜上卷)、若い美男の異性(柏木)に對する無自覺な過失に禍された結果、やがてこの方は尼となられた(柏木卷)。次いで長の病床にあつた紫上は、これも終に美しいその一生を閉じた(御法卷)。生きるすべを失つた源氏は、やがて來る自分の運命を感じる。この年源氏五十二歳(幻卷)。

源氏の薨(雲隱卷)後、明石中宮腹の匂宮と、女三宮腹の薫が世の評判の的になる(匂宮卷)。薫は宇治の入宮の姫大君を慕ふが(橋姫卷)、薄幸の佳人は間もなく病歿し(總角卷)、その妹は匂宮の許に迎へられた(早蕨卷)。薫は故大君に生き寫しの浮舟に遇ひ得たが、その浮舟は又匂宮をも忘れかね、悶へた末、宇治川に投身し

た(浮舟卷)。しかも後にさる僧都一家に救はれて尼となつた白衣の女こそ、その浮舟であるらしいのだつた(手習・夢浮橋卷)。

以上が大略の梗概であるが、その間に、薄命の美女夕顔の死があり(夕顔卷)、その遺兒玉鬘の奇しき源氏とのめぐり合ひ(玉鬘卷)、葵上の死にからまる六條御息所の恐しい生靈の執着(葵卷)、畸形薄遇の貴女紅鼻の姫君末摘花に對する源氏の幻滅と、しかも却つて深まる同情と庇護(末摘花卷)、葵上の忘形見夕霧と雲居雁の可憐な少年少女の戀物語(少女卷)、おしやべりの近江君の滑稽(常夏・行幸卷)、柏木の女三宮に對する悲戀とその死(若菜下卷・柏木卷)、同情から戀に變つてゆく落葉宮への夕霧の關心(夕霧卷)、亡き大君に對する薫の限りなき追慕(總角・早蕨卷)などが物語られ、又それらの物語の間を點綴して絢爛優艶の紅葉賀(紅葉賀卷)や、花の宴(花宴卷)、童舞の船樂の遊び(胡蝶卷)、薫香合せ(梅枝卷)賀の祝(若菜上下卷)など、平安風俗繪卷が繰展げられて、美しい物語を更に美しく彩り飾つて

ある。かうした中にも、雨夜の品定のやうな、女性を辛辣に評論した箇所や（帚木巻）、卓越した文藝論（螢巻）や、子女の教育観（同巻・常夏巻）など、紫式部の透徹した頭腦のひらめきがちら／＼と覗かれ、又作中人物の心の動きも深刻で細かに、たゞ夢のやうな美しい繪巻とのみ云はせない現實の複雑な人間世界を物語つてゐる、それが源氏物語である。

即ち源氏物語には、作者の人生觀に於ける現實と理想の両面が描き出されてゐる。人の世の美しい姿を、そして醜い姿をも、又喜びや愉しさと共に苦しみも惱みも悲しみも、餘さずに、そしてそれを自身の心境を通して、詩心を通して、精神の崇さを通して、物語らうとしてゐるのである。理想の男性光源氏、理想の女性紫上に、當時にあつての希求せられる最高の容相を具現し、その上それが偶像に近いものに見えながら、全然の偶像化になり了つてはゐないところに、作者の並々ならぬ手腕が認められる。又源氏物語全體が抒情詩的な香氣に包まれて、人

間苦も悲運も醜惡も、すべて作者の愛と同情の手に淨められ美化され、しかも尙且峻嚴な批判の筆は、目に見えぬ鋭さを以て迫るところに、抒情小説でもあり、客觀小説でもあり、又詩でもあり物語でもあり、そして人生批評でもある源氏物語が現前するのである。そして主人公をめぐつてそこに描き出されるさまざまの男女や事件は、決して實人生以外のものではなく、生きた平安時代であり、その人物の心理は又我々の心理でもある。こゝに更に寫實小説としての、世相小説としての、そして又心理小説としての源氏物語が加へられる。それに關聯して、作者の體験的及び心境的なものが、事件的にも精神的にも相當濃く出てゐるところに又、身邊小説乃至心境小説的傾向が見られる。源氏物語はかうした複雑な多面的な性質を持つてゐる。この他風俗・習慣・儀式・建築・音樂・遊戲・言語等の面に互つて、源氏物語の持つ文化史的價値は又頗る大きい。

要するに、源氏物語は宮廷生活を中心としての平安時代世相の活寫であるが故

に、その意味に於て明らかに寫實小説であり、作者自身も螢卷に言つてゐる通りに、「この世の外のことならぬ」ありのまゝの實人生の描寫を試みようとしたのである。坪内逍遙が小説神髓に、源氏物語を世話小説の典型として、

専ら上流の情態を寫せる世話物語と稱しつべし。

と評してゐるのは、この一面を指摘した至言であつた。しかしその寫實はたゞ皮相淺薄な寫實ではなく、所謂虛實皮膜の間、ロマンチズムとリアリズムの接觸するところをねらつた、藝術の最高境地を往かうとしたもので、そしてそれは見事になし遂げられてゐるのである。即ち源氏物語に於て企圖せられた藝術は、要約して言へば、リアリズムの門を潛つたアイデアリズム乃至浪漫精神の表現である。清少納言の枕草子にも、西鶴の諸作品にも決して劣らぬリアリズムを持つてゐるが、單なるリアリズムの一語では蔽ひ盡くせぬ驚くべき不思議な多様さ、複雑さ、深さを持つてゐる。冷靜な現實描寫では飽き足らぬ高遠な理想と清純熾烈

な情熱に生きねば止まぬ、そしてその現實と理想との矛盾の中に、人間の生きて行く努力の尊い悦びと價値を見出し、しかも屢々之を裏切る宿命と社會と自己内心の撞着とに泣き悩み續けるその心持を、物語の上に美化し藝術化したのが源氏物語である。

本居宣長は源氏物語の本質を論じて「物の哀れ」を寫したものであると言ふ。これは源語が道德的立場から書かれたものであるとか、或は佛法の教理を説く爲に書かれたものであるとかいふ従前の儒佛に偏倚した僻見を打破して、源氏物語を文學として直視し、その眞髓を捉へ得た千古の卓説であることは云ふまでもない。しかし宣長は「物の哀れ」を寫すのが源語に於ける創作の窮極の目的であるとして、あまりにそれを絶對値のものとした爲に、この情感を又理念視、完全視し過ぎようとした傾きがあり、従つて物の哀れの極致たる戀愛をば、人生の最も美しいものとして描かうとしたのが源氏物語であるとの解釋は、偏に源語の文學

的價値を世界文藝史上に主張してくれたと同時に、源氏物語の眞値の底を探るに
もう一步の物足りなさを感せしめるものである。源氏物語を通して觀られる作者
紫式部は決して戀愛至上主義者ではない。個人の意識的自由を常に尊重し、且戀
愛をば生活の中での最も美しい詩として描いてはゐるが、だからとて物の哀れ絶
對論者ではない。物の哀れの美の反面に於ける罪と惡とを十分に認知してゐる。
それは藤壺の場合に於ける作者の嚴しい批判や、藤壺や源氏や柏木やの深刻な煩
悶や反省の苦しみを見ても分る。又物の哀れに進み過ぎることを、作者は常にい
ろ／＼な人物の行ひや心に懼れ慎ませ戒めてゐるのでも推知出来る。作者の絶
對とし理想とする所は、純眞中正な「物の哀れ」であつて、そこに人生の眞善な
る美を見出さうとしてゐるのである。だから作者は戀愛小説を描いても戀愛萬能
主義者ではないのである。小説の價値を「日本紀などはたゞ片そばぞかし」と、
史書以上に置いた主張からも、寧ろ藝術至上主義者と呼ぶべきであらう。そし

て彼女は單なる自然主義的な沒理想の寫實家ではなくして、却つて倫理主義を根
柢に包藏して理想人への憧憬と美の創造とに生きようとする、しかも亦冷靜に嚴
肅に——その場合、作者の態度が屢々唯物的ですらあるのに驚かされるほど——
人生の本然の姿をも見究めようとする、(但し彼女は勿論唯物主義者ではない。)
而してその二つの態度を巧に渾一した相に於て併せ掴み得てゐた偉大な藝術天才
であつた。(宣長の「物の哀れ」論も實は現實生活に於ての戀愛禮讚ではなくて、
源氏物語の文學性を強調する意味がその主想で、結局紫式部の主張と甚だしく背
反するものではなかつたと言へるが、紫女は此の點更に一段高い境地に住してゐ
ることも事實である。)

かうした作者の深い精神内容をより美しく讀者に訴へ傳へるのはその巧な文章
であつた。まことに源語の柔軟な含蓄のある文章は、源語の持つ深さに一層味ひ
を加へ、美しさに一層艶を持たせてゐる。源語の文章を目して、だら／＼と冗長

で難解であると非難する人もある。一面確にさういふ嫌はある。外觀的に枕草子の文章などに比較すれば、なる程句切が長く、敘述が複雑で、解し難いところはある。しかし唯さう簡単に評し去るのは笑止な不當な觀察でしかない。さういふ人は源語の内容と表現の一致したところにある微妙な美しさの解せられぬ人である。盡きざる情感の流れを、淀みなく繰りのべてゆく麗雅な詩筆、複雑纏綿した繊細な情緒の柔軟な精敘は、他の作家の何人も追隨し得ない所である。

何處を披いても源語の文はさうであるが、特に抒情詩味の豊かな箇所の適例は、やはり昔からもてはやされてゐる通り、ゆげのみやうぶ靱負命婦が桐壺帝の御使として亡き桐壺更衣の母の菀の宿を訪ねる哀切な情景（桐壺卷）、源氏が夕顔の宿に泊つた夜のわびしい賤が伏屋の有様（夕顔卷）、女の齋宮につき添うて伊勢に下る六條御息所を源氏が野宮ののみやに訪れて別れを惜しむ場面（賢木卷）、それに最も有名な、謫居の源氏が遙か都の空を戀ひ偲ぶ例の「須磨にはいとこ心づくしの秋風に」の名文（須磨卷）

など、時と處と人とが一に融け合つて、無限の情趣を浮び出させる。世俗的にあまり知られてゐない同じ佳文の一例としては、夕霧卷の、夕霧大將が小野の里に柏木衛門督の未亡人落葉宮を訪門する條など指摘し得られる。

更に情景描寫に加へて、人物の性格の書分けの周到さと、特に錯綜した心理の陰影をまで精しく映し出した靈腕は、玉の小櫛の宣長が口を極めて絶讃してゐるところである。その具體例も亦無數に挙げ得られるのであるが、漢文學に於ける心理描寫が類型に墮する粗笨さに對照して、源語のその懸絶拔群なる所以を力説した鈴屋翁の明鑑を確認する爲には、源氏と藤壺との各々の悲苦反省はもとより、その他帚木・空蟬兩卷に於ける空蟬君の煩悶、夕顔卷の夕顔上に對する源氏の焦躁、葵卷の六條御息所の懊惱、明石卷の明石上の心情、宇治十帖の大君と薰大將の互の胸裡等を躊躇なく提示出来る。

以上の兩特長が全卷隨處にそれ／＼に發揮されてゐると言つただけではまだ的

確でない。實は右の客觀的情景と、主觀的心理描寫の渾然一體となつたところの表現に、作者は特に勝れた手腕を示す、と評した方が更に適切である。かうして卷を開く毎、頁を繰る毎、行を追ふ毎に、きめのこまかい、香り高い、味と深みのある洗練された國語の迫力が、生動する人間の群像と共に、讀者を魅了せずにおかないのである。

是るを求めたい見地に立てば、源語と雖ももとより完璧とは言へない。限られた經驗、狭い特殊階級の生活、纖細過ぎた情緒、脆弱な心意、感情批判の偏傾、複雑懊惱の成心は深い代りに、素朴・快活な童心には、部分的には超凡なものが見られても、全體としては乏しい。又もつと國民的、社會的な動向も、強い進取的積極的な氣宇も不足してゐる。もつと空想があつてもいい。何の卷、何の場面の一をとつても、殆ど源氏全卷の面目を窺ひ得るほど、同じやうな場面が出て來る平凡さは、すぐれた平凡さであると共に、現代の一般讀者には飽きられる恐れ

もある。それらのすべては、やはり時代に生きた女性の觀た人生であり、貴族生活のみの中に環境を有した女性の味はひ營んだ生活であつたからである。純小説としても、主人公の非現實性の過多や、構想の單純、事件の葛藤展開の餘りに無さ過ぎる事や、又は敘述表現の上にも、検討さるべき問題が多々ある。趣向の重複、詞章の重複、或は作者の記憶違ひに基づく前後の撞着、その他いろいろの缺陷があることは否み難い。しかしながら、それらの缺點を以てして決して覆はれ得ないほど、源氏物語の偉大さの輝いてゐることは、言を俟たない。

又、此の天才紫式部の源氏物語も、之を日本文學史上の一作品、一現象として觀る時、勿論先行文學の影響を無視しては考へられない。源氏物語は小説であると同時に物語である。寫さうとする一方、語らうとする態度が明白に看取せられる。例へば「いづれの御時にか……」の書き出しは、伊勢物語の「昔男あけり」、竹取物語の「今は昔」の昔語りに通有する氣分であり、且卷々の終りも、多くは

「……となむ」「……とや」「……とぞ」のやうに、説話様式に従つてゐる。それから又敘述の中間に作者が顔を出して、説明的辨疏的辭句を挿入したりしてゐる。この點からすれば、源氏物語はやはり「源氏の物語」「紫の物語」である。そしてそれら伊勢・竹取・宇津保等の歌物語や昔物語に見られると同じ説話體形式から全然離脱しきつてゐないことを歴然と示してゐる。同時に依然たる舊態のまま、を踏襲せず、更に進んだ手法で一段飛躍させて、暗示的で斷續的な優婉縹渺たる姿態に活かすことにまで成功した技能は、超凡の讚辭に十分値せねばならぬ。

その形態に於て、源氏物語はかく先行の物語に連接してゐると共に、素材に於ても構想に於ても、亦詞章に於ても、先行文學に負ふ所の尠少でないことは、これ亦古來屢々論せられ、考究せられたところである。さきに述べた竹取・伊勢・宇津保・落窪は勿論、散佚して傳存しない住吉物語・交野少將物語・狛野物語の

類から、或は土佐日記・蜻蛉日記（殊に蜻蛉日記の作者をば式部は敬慕してゐたやうで、我が身に似た境遇に同情し、その心境に共鳴したと思はれ、屢々源語中にその影響と思はれる箇所が見られる）、更に物語や日記のみでなく、溯つては古事記・日本紀の古典、又和歌は萬葉・古今・後撰・拾遺・六帖・伊勢集・貫之集・躬恒集、或はその他の古歌、續日本紀の歌等を始め、漢詩文では長恨歌は言ふまでもなく、白氏文集・文選・詩經・史記・漢書・孝經・儀禮・老子・莊子・管子・歸去來辭・遊仙窟の類、及び和漢朗詠集・菅家後集等から引用せられ、又は影響せられてゐる。又佛典の影響も相當多く、法華經を始め、涅槃經・中阿含經・金光明經・正法念經・楞嚴經・大樹緊那羅經・太子休魄經・摩訶止觀・大論その外夥しい數に上る。私見に従へば、同時代の好敵手たる清少納言の枕草子からさへも知らず識らず影響を受けてゐはすまいかと思はれる節もかなりにある。就中先行文學の影響としての最も著しい一例をとれば、歌物語から小説形態への

推移、短篇説話の連結から、全體としての構想を有つ長篇文學への展開といふ土に於て、伊勢物語の直接の垂範を見、光源氏の情趣的生涯を中心としたのも、昔男の業平の進展とも觀られ得る。かくして特に伊勢物語は詞句・和歌・構想等いろ／＼の側から源語に與へた感化は大きい。

が、こゝでも亦繰返さなければならぬことは、先行文學と源語との關係を指摘しても、その爲に源語の價値、そしてその獨創的な點に就いての價値が傷けられるものでも減じるものでも決してないといふ點である。それは影響を與へた先行文學の素材・構想・表現といつたそれらのものが一度紫女の手を通すと、すべて作者の觀照の裡に吸収せられ融合せられ醇化せられて、全く別箇の姿となり、紫女のものとなつて生かされ、新たにされて表現されてゐるからである。そして縱へ、非現實な空想から暗示を得たものを素材として用ゐる場合でも、表現の手法に於てはリアリズムを用ゐねばならぬといふ的確な進歩した創作觀を、この作

者は持してゐたのである。つまりあらゆる材料を自由に驅使して、先行物語の豫想し得なかつた境地にまで、文學の世界を推し進め、所謂小説としての物語文學の立派な典型を創り上げてゐるのが、三歎措かざらしめられる所以でなければならぬ。

そして上に擧げた我が國の古典や歌集や、並びに漢籍及び佛典の夥しい數は、同時に作者の學問の博さと深さとを物語るもので、學者爲時の女として、幼時夙くも長兄を凌駕し、又彰子中宮に樂府を御教授申上げたといふ自記を裏切らないばかりか、男性を屈伏して獨り快しとした清少納言をして、その學殖の專有の誇を恣にせしめないことを示して餘りがある。佛典の知識に於ても、紫式部は法華經を讀まなかつたと惜しんで、「これのみなむ第一の難と覺ゆる」と評した無名草子は、誤解乃至源語熟讀の不足についての告白と共に、その言を取消すべき義務があらう。

上述の如く源氏物語は、それ以前の内外古今諸種多様の文學と知識を凝成し完備し、一面詩と散文との合致によるすぐれた文學形態を創成し、——それは又「やまと假名」の典型文學の完成でもあつた。——且内容に於て、態度に於て、手法に於て、精神に於て、深さと廣さと新しさと美しさを倍加して、日本小説史上の最高峰を築き上げた。そして同時にそれは世界文藝史上に一新紀元を劃したのでもあつたことを、宇宙の偉觀として、人類の文化史は改めて特記せねばならない。

しかも眼を轉じて源氏以後の物語小説を一瞥すると、平安時代後期から中世の御伽草子に至るまで、すべて皆源語の追隨者であり、或は糟粕ですらあるといつて過言でない。又近世小説の鼻祖たる西鶴の一代男が即ち源語の元祿時代の再生であることが示してゐるやうに、そして更に明治文壇の代表者たる紅葉も一葉も、西鶴と共に又源氏の影響を受けてゐる事實が指摘せられるやうに、そして又源氏

物語以後源氏物語なき事實がこれを證するやうに、日本小説史に於ての源氏物語の位置は文學史的意味に於ても、藝術的價值の上からも、實に最大最上のものを以て擬せられても溢美ではないと思ふ。獨り小説史上に限らず、謠曲の源氏物を始め、軍記物・淨瑠璃・脚本・歌謠、及び文學以外の舞踊・繪畫・工藝・香道等に至るまで、廣汎に且永世に互つて源氏物語が日本人の生活に影響し、滲透してゐることはまことに多大なものがある。(所謂隆能源氏として知られる源氏物語繪卷と、源氏香圖とは就中世人の耳目に熟してゐる。) それは又この名篇が如何に國民に愛好支持將た記念せられてゐるかの標示でもある。

源氏物語が世に出るや、夙くもかの更級日記の作者が、長い間入手を念願してゐたこの物語を叔母の許から借り出して歸る途々の嬉しさ、そして

走る／＼僅かに見つ、心も得ず心許なく思ふ源氏を、一の卷よりして、人もまじらず、几帳の内に打臥して、引出でつ、見る心地、後の位も何にかは

せむ。晝は日ぐらし、夜は目の覺めたる限り、火を近くともして、これを見るより外の事なければ、おのづから名などはそらに覺え浮ぶ。

と熱中忘我したのは、如何に文藝が人間の心をとらへる力の強く大きいかを偽りなく語つてゐると共に、それはその文藝が源氏物語といふ具象化せられたる作品であることによつて、愈々眞に現實性を與へられるものであり、この一文學少女の心持は恐らく當時のすべての人々の源氏への憧憬、讚歎の聲を代表してゐるものであつた。そして又、

さてもこの源氏作り出でたることこそ、思へど／＼この世一つならず珍らかに思ほゆれ。誠に佛に申し請ひたりける験にやとこそ覺ゆれ。それより後の物語は、思へばやすかりぬべきものなり。かれを才覺にて作らむに、源氏に勝りたらむ事を作り出す人ありなむ。僅に宇津保・竹取・住吉などばかりを物語とて見けむ心地、さばかりに作り出でけむ、凡夫の仕業とも覺えぬこと

なり。

と驚異してゐる無名草子の評言は、更に進んで、此の獨創不世出の偉才の出現に對する讚美が信仰的崇敬にまで達した時代人の聲である。特に順徳上皇が源氏物語を「不可説未曾有」のもの、即ち批評以上の書と仰せられたのは、源氏物語の最高批評として、永く銘記せられねばならぬところである。

かくて源氏物語は不磨の生命を保ち、世界最古の大小説としての地位と、萬代に輝く藝術値を主張して、全世界に等しく享受さるべき日本文藝の記念塔であらねばならない。西暦約一千年、日本紀元では約一千六百六十年の昔、未だ世界何れの國にもこれに近接し得るものすら皆無の時代に、この名品を我が國が持つたことは、まさに地上の奇蹟、日本文化の誇と云はずして何であらう。その時既に日本文學は世界的の位置を獲得したのであつたと言ふべきである。そしてこの榮ある殊勳者、東海の島國が生んだ唯一無二の文藝神、それこそは實に紫式部の名

で呼ばれる我等の祖先女性であつた。今ならば當然彼女の所産はノーベル賞に値するものと言はねばならない。

紫式部日記と紫式部集

紫式部日記の名は水鏡・明月記・河海抄等諸書に見えてゐるが、この日記は寛弘五年七月、彰子中宮の里第土御門殿（道長邸）に於て一條天皇第二皇子敦成親王（後一條天皇）御誕生の御模様から始まつて、その一年間及び翌寛弘六年の正月の事を記し、次いで七年の正月の諸儀式と、第三皇子敦良親王（後朱雀天皇）御誕生後の五十日の御祝の有様が記されてある。日記とは云つても日を遂うての記事を一々書き留めたのではなく、式部が宮仕に上つて後、印象深かつた儀式や公事、特に御産儀の事を精寫し、更に自身の心境や感想を述懐的に記したり、和泉式部

や清少納言を始め、同時代の女房達の人物評を試みたりしてゐて、全體が纏つた一篇としての完形を持つてゐるものではない。従つて傳はつてゐる現存のものには原形のままではないらしく、脱漏があるか錯簡があるか、或は又式部がその時々には又は後に思ひ出して自分のつれづれの慰みに書いておいたものを、後の人か或は娘か誰かが纏めて世に出したのではあるまいかとも思はれる。寛弘六年の正月三日と同十一日（一説、七月）の記事の間に挟まつてゐる人物評や感想や教訓めいた部分は、他の部分と全然違つてゐるので、或は娘（若しくは心友）に與へた消息文が紛れ込んだのではあるまいかといふ説が普通に行はれてゐるやうである。式部日記の文化的價值は、勿論有職故實や儀式や風俗習慣などを精しく記した點にあるけれども、それ以外に筆者の偽らざる感想や告白を記した部分や、就中この消息文とされてゐる箇所こそ、源氏物語の作者を研究する上に興味ある問題が含まれてゐるのである。

日記の初めの御産の記事は、前記の如く寛弘五年の七月で、彼女が宮仕に上つたのをその前年の十二月とすれば、出仕後日なほ浅い半年後のことになる。敦成親王御誕生前後の模様をば細大漏らさず、諸儀式から女房達の服装、調度はもとより、道長始め人々の言動まで、そのめでたい華やかさに目をみはりつゝ、精密な筆に寫してゐるのは、初めて経験する宮廷生活に強い新な感動を持ち得たが故であらう。今日記の主要記事を拾つて行くと、先づ

秋のけはひの立つまゝに、土御門殿の有様、いはむ方なくをかし。池のわたりの梢ども、やり水のほとりの叢、おのがじし色づきわたりつゝ、大方の空も艶なるにもてはやされて、不斷の御讀經の聲々、哀れまさりけり。やうやう涼しき風の氣色にも、例の絶えせぬ水の音なひ、夜もすがら聞きまがはさる。御前(彰子中宮)にも、近う侍ふ人々、はかなき物語するを聞き召しつゝ、惱ましうおはずべかめるを、さりげなくもてかくさせ給へり。御有様などの、

いとさらなることなれど、憂き世の慰めには、かゝる御前をこそ尋ね参るべかりけれと、うつし心をば引きたがへ、たとしへなく、萬づ忘るゝにも、且はあやしき。

といふ有名な冒頭の一節に始まり、御産屋の御儀のいろ／＼、次は女郎花の即詠(七四頁参照)、八月二十六日の薰物合せ、九月九日の重陽の節の菊の着せ綿、十日、いよいよ近づく御日取に、驗者達の讀經や陰陽師連の祈禱の忙しさといった事などが記されて居り、十一日には中宮が御産の御座への御移りがあり、高僧達の祈禱は益々高潮し、道長以下侍女達まで御平産を祈つて大騒ぎをしてゐる中に、今参りの自分とて、まだ「見奉り馴るゝ程」はないが、やはり胸一ぱいの緊張を覚える。御物怪ののゝしりわめく異様のさまに、誰も彼も痛心しつゝ、几帳の後には目白押しに並んだ女房達の、目を泣きはらし、髪に散米うらまきを雪のやうにふりかゝらせながら、おしろいも涙に流れる巴が顔を忘れて放心した様。明けて十

二日皇子御誕生、人々も晴れ々とした色。御湯殿の御儀に奉仕する女房達の麗はしい装束、嚴かにめでたき式事、三日の夜中宮大夫以下の御産養うぶやしなひ、五日の夜殿(道長)の御産養、火影に映える女房達の衣装のきら／＼しさ、宴會の様。翌六日は月の光を浴びて若い人々の船遊び。七日は帝の特に嚴めしい御産養、九日春宮權大夫(頼通)の御産養。十月土御門殿に行幸を仰ぐとて、道長邸はその準備に忙殺され、光榮と喜悅の環境の中に、却つて痛感する孤獨の哀しみ(六六頁参照)、行幸當日の十六日は龍頭錦首に船樂の盛觀、玉座の御次の室に侍する二人の内侍の支那風の美人畫を見るやうな、天女さながらの姿、その他の供奉の人々の衣装の美々しさ。殿上人達の舞姿、樂の音。宛然源氏物語の紅葉賀や胡蝶卷の宴樂そのまゝの場面がこゝに記されてゐる。次いで十一月一日の若宮御五十日いの御慶び、左衛門督公任に「若紫や云々」と呼びかけられたのはこの夜のことである。(六七、一一一頁参照)そして道長始め上下皆喜びに酔ひしれて、宰相君と御帳の後に隠れ

てみたのを採し出されて歌を詠まされたりもした。

さて中宮の内裏還啓の御日も近づき、この頃は毎日のやうに草子作りである。局に隠しておいた物語の本を道長にあさられ、尙子に奉られてしまつたのもこの時である。(一一二頁参照)その間に僅かのお暇をいたゞいて、里に歸つた折の我が家のさまと自分の心境を式部はかう書いてゐる。

見所もなき故里ふるさとの木立を見るにも物むづかしう思ひ亂れて、年ごろつれ／＼に眺め明し暮しつゝ、花鳥の色をも音をも、春秋にゆきかふ空の氣色、月の影、霜雪を見て、その時來にけりとはかり思ひ分きつゝ、如何にや如何にとばかり、行末の心細さはやる方なきものから、はかなき物語などにつけて、打語らふ人、同じ心なるは、哀れに書き交し、少し氣遠きたよりどもを尋ねても云ひけるを、たゞこれをさま／＼にあへしらひ、そゞろごとにつれ／＼をば慰めつゝ、世にあるべき人數とは思はずながら、さし當りて、恥かしい

みじと思ひ知るかたばかりのがれたりしを、さも残せる事なく思ひ知る身の憂さかな。(中略)すべてはかなき事に觸れても、あらぬ世に來たる心地ぞ、こゝにてしも打ちまさり、物哀れりける。

十一月十七日夕刻、中宮並びに皇子敦成親王還啓。御供申上げて、その夜少少將の君と細殿の局に語る。(九八頁参照)君の不運の身の上も同情されてならぬ。十一月二十日、五節の舞姫の參入、寅の日の御前の試、卯の日の童女御覽、同月下の酉、賀茂臨時の祭の使は殿の權中將(道長の息教通)。

十二月二十九日、初めて宮仕に上つたのも今宵。當時を回想すると、すつかり世馴れた宮仕人になつてしまつた今の自分が、我ながら淺ましくなつてしまふ。(六〇・七三頁参照)その翌つごもりの夜は不測の盜難に遭つて、初めて經驗させられた恐怖の極み。

寛弘六年正月三日、中宮御上り。御供の大納言や宰相の君・宣旨の君の裝束、

姿つき、とりぐ美しい限りである。(以下所謂消息文)このついでに少し女房達の容姿について語らうと、宰相の君・少少將の君・宮の内侍・式部のおもと・小大夫・源式部・小兵衛丞・宮木の侍從・五節の辨・小馬こまなどいふ人々を擧げて、一に髪、顔、心と細かく觀察し、その次に齋院の中將に觸れ、その筆に成る手簡の中に、齋院方を殊更に自讃してあるのに對して、當宮は唯派手でないだけと辯じ、彼が此方を貶しめる心淺さを嗤つてゐる。(一〇七頁参照)次が例の和泉式部に丹波守の北方(赤染衛門)、並びに清少納言の評(一〇六・一〇七頁参照)で、溫良な式部にも似ず眞向から痛罵してゐるのは、日頃の抑へかねた内心の不滿を、筆の走りのついでに思はず吐露したものと思はれる。

風の涼しい夕暮、獨り琴をかき鳴らしては、人に物思ひと怪しまれはせぬかと懼れ、或は厨子から蟲くひの古歌物語など一つ二つ取り出して讀んでも早蔭口の種と、周圍への警戒に心を勞することを語り、自分に關する世評、それに對する

内省的な述懐を述べ、そのついでに、あまり人目に立つ振舞をせぬこと、寸言をもつ、しめなど、その他教訓めいた記述が次にあるのは、この前後の文が娘に與へた消息文と推定される根據とされるところである。次は陛下（一條天皇）の御賞美がもとで、左衛門内侍の饒舌から、日本紀の御局とあだ名を立てられ、以後はいよ／＼一といふ字さへ讀めない顔をしてゐたこと（六八頁参照）、幼時兄より先に史記を憶えて父を感歎させたこと（四二頁参照）、中宮に文集・樂府を御教へ申上げたこと（六〇頁参照）など併せ記され、又遁世への焦躁、母としての責務との板挟みの惱が告白されてゐる。（七四頁参照）（以上消息文終り。）

さて日記の記述はもとに返り、正月（又、七月）十一日中宮御堂渡御、御佛事の御營み、終つて朧月夜の舟遊。その頃である、「源氏の物語」が中宮の御前にあつたのを道長が見て、例の「すき者と」と戯れ詠んだのは（七五頁参照）。又その道長が夜もすがら式部の局の戸口を叩きわびたのも。（七六頁参照）

記事は寛弘七年正月に飛んで、二日・三日の慶賀の宴遊、すべてめでたい限りの道長夫妻全盛の姿である。

正月十五日は第三皇子敦良親王（後朱雀天皇。原文には二の宮とあるが、三の宮の誤りかとも思はれる。或は中宮彰子にとつては第二皇子に當らせ給ふからかも知れない。）の御五十日の祝の儀式の當日、女房達の美しい装ひ。御前に居流れた殿上人達の華やかさ。琵琶・琴・笙などの合奏は面白く雲居を響かせる。以上が日記の大略である。すべて道長の榮華の様を背景として、繰展げられる宮廷繪卷、その中に筆者の心境が織りませられて、式部の生活と同時に性格も窺はれ、彼女の相當高い自負心や、又和泉式部・清少納言などを評した辛辣な態度には、強い競争心や嫉妬心ものぞかれる。表面非常に自己を抑制し、謙讓であつただけに、かうした告白の形をとつた不満や憤慨の醜態が一段彼女の人間性を現實づける意義が大きい。かうしたかなり赤裸々な偽らざる内心を吐露した日記で

あればこそ、式部の人間を解剖する上に、又その作品たる源氏物語の研究に資する上に、甚だ重要な価値を主張してゐるのである。又副産物として、この日記の中には、道長のいろ／＼な場合に於ける言動が非常によく寫されてゐて、彼の性格や心ゆくばかりの榮華の生活が窺はれて面白い。——敦成親王の御誕生に喜びの頂天に達した彼は、常に夜中でも曉でもかまはず若宮を抱き參らせて御愛しみ申上げ、或時など宮の御尿に衣が濡れたのを干しながら、「あはれこの宮の御尿に濡るゝは嬉しきわざかな。この濡れたる、あぶるこそ思ふやうなる心地すれ」と悦んだ様子、土御門殿に行幸を御迎へした時、感泣の極にあつたこと、若宮の御五十日の御祝の酔の冗談に「宮の御父にてまろわろからず、まろが女にて宮わろくおはします、……」とわれぼめしたことなど、道長の姿が生き／＼と浮び出てゐる。

文章は先に挙げた冒頭の一節が最も美文で、自然と人事とが交流したところの

敘述に勝れたものを示し、やはり源語の作者の筆たるを思はしめるが、そして又隨所の一節は源語の一節として置き換へられても不相應でない程の素材と内容を有つてはゐるが、概して言へば、全體としては源氏物語ほど推敲洗練されてはゐず、筆にまかせて書き流した傾きが大きいを見る。所謂消息文以外の部分でも、隨時記し留めたと思はれる箇所もあれば、後から回想して書いたと推知し得られる箇所もある。勿論儀式や服装の精寫は、縦へ回想の記述である場合でも、目撃した直接の記述を元としたものであるのは明らかであるから、手控へに既に詳記されてゐた部分が多きを占めると思はれる。但し冒頭の文の如きは、少くとも後の方の部分と違つて文章も練つてあるし、起首として改まつた氣持を以て書いたらしい事が認められるから、若しかしたら前半、敦成親王の御五十日の記述あたりまでは、中宮にでも御覽に入れるつもりで書いたものかとも想像されるが、斷定は出来ない。

そして他の女流日記たる蜻蛉日記や和泉式部日記のやうな心境小説的、私小説的日記の形態として企圖されたものとは稍趣を異にし、全く筆者自身の見聞をそのまゝに記した日記文學で、この點は清少納言の枕草子(特にその自傳的記述の部分)と相通有した性質をもつてゐる。なほ榮華物語初花卷の敦成親王御降誕の記事は、即ちこの紫式部日記の同條の文をさながらに借りて採り用ゐてあること、及びこの日記は繪卷(信實筆。詞、後京極良經)として亦有名であるが、古來それを榮華物語の繪卷と誤られてゐたのは、右の事實にも關係するものであらうといふことを終りに言ひ添へて置く。

紫式部には又家集一卷が傳存してゐる。所收歌數は百二十三首、内十三首は亦日記中に見えるもので、(但し日記の歌で「紀の國の」「水鳥を」「年暮れて」「すきもの」と(道長)及び「人にまだ」の五首だけ含まれてゐない。)その他は多く後

拾遺集以下の勅撰集に採られてゐる。日記と共に式部の生活や心境や環境など傳記を識るのに好資料である。卷頭は新古今集(雜上)及び小倉百人一首にも入つてゐて有名な、「めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に」の一首である。(但し止めは「夜半の月影」となつてゐる。)夫宣孝との間に交された歌、道長との贈答歌、或は女の友達と取り交した歌の他は、自らの即興或は詠歎が大部分を占めてゐるが、特に秀れたといふほどのものは多くはない。

今までに引用した歌の數も相當であるから、その大凡は既に示されてゐるわけであるが、なほ他のものを例擧すれば、

かき曇り夕立の浪の荒ければ浮きたる舟のしづここ
ろなき

これは父の越前赴任に伴うた折の歌らしく、この他同じ旅で詠んだと思はれるのが數首ある。大部分は前に引き且述べたやうに、旅情に併せて都を戀ひ偲ぶ心持

が歌はれてゐる(四七頁参照)。夫の宣孝といふ人物と式部との交渉は、主として家集の贈答歌とその詞書によつてのみ推察され得るので、その點特に家集の意義が深い。これも前に既に引掲したところであるが(五二―五六頁参照)、他にも

人のおこせたる

うち忍び歎き明せばしのゝめのほがらかにだに夢を見ぬかな

七月ついたちのころ、あけぼのなりけり、返し

しのゝめの空きり渡りいつしかに秋のけしきに世はなりにけり

七日

大方を思へばゆかし天の川今日の逢ふ瀬はうらやまれけり

返し

天の川逢ふ瀬はよその雲居にて絶えぬ契し世々にあせずば

門の前より、渡るとて、うち解けたらむとあるに、書きつけて返しやる

なほざりの便りにはむ人ごとにうち解けてしも見えじとぞ思ふ

なども同じ贈答の内であらう。その宣孝に死別して、「名もむつまじ」と鹽釜の煙に親愛を感じた詠(五七頁参照)と共に、

夕霧にみし方かれし鴛鴦の子のあとをみるくまどはるゝかな

或は

散る花を歎きし人は木の下この淋しきことやかねて知

りけむ

思ひたえせぬと亡き人の言ひけることを思ひ出でたるなり。

の二首にも、夫の死が聯想される感がある。宮仕の憂苦、煩勞、孤獨の心境を詠じた數首は既に掲出した。(六七・六九・七二頁等参照)

垣根荒れ淋しきまさるとこなつに露置き添はむ秋ま
では見じ

花すゝき葉分の露や何にかく枯れゆく野邊に消えと
まるらむ

世にふるになぞかひ沼の生けらじと思ひぞ沈む底は
知らねど

の如きは式部が病の床で詠んだものと推定され得る。

その他、勅撰集のみによつて傳へられてゐる作もある。

世の中を何歎かまし山櫻花見るほどの心なりせば

(後拾遺、春上)

何處とも身をやる方の知られねば憂しと見つゝもな
がらふるかな (千載、雑中)

ほとゝぎす聲待つほどは片岡の森のしづくに立ちや

ぬれまし (新古今、夏)

などそれである。

又伊勢大輔集や榮華物語にも出てゐる歌のあることは前に述べた。(これらも亦勅撰集に入つてゐる。)式部の詠で勅撰集に載せられてある歌は、後拾遺・千載・新古今・新勅撰・續後撰・續古今・續拾遺・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺に互つて五十八首を算する。

源氏物語も亦一箇の老大なる歌物語であるといへるほどに、毎卷多數の短歌を

以て全文が連繫されてゐる。その中の作が勅撰集に入つてゐるものもある。が、式部の歌は温雅ではあるが、總じて天才的とは言ひ難い。なほ歌人としての紫式部については、後章に述べることにする。

世に紫式部日記歌と稱するものが傳はつてゐる。同日記所載の和歌を抄出集録したもの如き印象を興へる題名であるけれども、初めの十二首だけが家集及び日記と一致する（内、家集のみと共通五首、日記のみと共通二首）外、他は全部赤染衛門集所出の歌が混入せられてゐて、資料としては信憑を置き難いものであるから、今採らない。

作品を通して観た紫式部

女性としての紫式部

源氏物語の夕顔巻に紫式部は、光源氏の口を通して、

はかなびたるこそ女はらうたけれ（可憐ぞ）。かしこく人に靡かぬ、いと心づきなき（好マシクナイ）わざなり。自ら（私自身）はかしくすくよかならぬ心習ひに、女はたゞ柔かにて、取り外しては人に欺かれぬべきが（ダマサレカネナオ女デキテ）、さすがに物愼みし、見る人（夫）の心には従はむなむ哀れにて、

と語つて、おとなしい、すなほな、柔和な心の女性を求めてゐるが、彼女自身の

源氏物語

性格はどうであつたらうか。前章までに述べたやうに、日記や家集を見ると、其處に現在する人間紫式部の影像是、如上彼女の求めてゐる女性とは相當に違つた複雑な性格を持つてゐるやうである。それは丁度源氏物語が非常に複雑な面を持つてゐるのと同様で、彼女の性格がその作品に最もよく現れてゐるといへる。あくまで溫和でつゝ、ましい反面、かなり負け嫌ひの反撥心と自己を守る誇が強いのは、冷靜な中に激しい情熱を藏してゐる彼女の性格を物語る。

凡て人はおいらか(穩和)に、少し心おきてのどやかにおちのぬるを本としてこそ、故も由も(品格モタシナミモ)をかしくうしろやすけれ(好感ガモテテ不安サガナイ)。(日記)

とは彼女の處世のモットーであり、衆人環視の中に於ける保身の用意でもあつた。そして「日本紀の局」と評判を立てられてからは、一といふ文字さへ讀めぬ顔をし、上東門院に御教へるのさへ内密にしたといふ、一寸不自然にさへ感じ

られるほどの謙遜家である式部である。そのくせ自負心の恐しく強い、何人にも譲らぬ大きな矜持を内心に有してゐたのは、「みづから身をや思ひすつべき」と自歎した歌にも(六九頁参照)、例の僚輩を論評した筆鋒にも、おのづと溢れ出てる。一見矛盾のやうであるが、俊敏で才鋭な藝術天才の奔放に身をまかせず、女性としての美しい優雅な品格に己れを磨き上げようとする努力の精進がそこに見られるのである。彼女は實に苦しいほどの克己の修養家である。

若人だに重りかならむと重き見ラレヨウト)まめたち侍る(マジメクサル)める世に、見書しうざれ侍らむも、いとかたは(ミニクイ)ならむ。唯大方をいとかく情(なさけ)らすもがなと見侍り。(日記)

とちやんと平常の自分の行動を規格してしまつてゐる。かくてつとめて律し、同時に又必要以て警戒して、容易に他人に自分を見すかさされまい。彼女であつた。

誰憚らぬ言葉や行ひをさへ、召使共の前ですら慎み、自分を正しく解してもらへない人には、發言も無用と棄權し、差出て人の談話に口を入れる我は顔の人のある座では、「うるさければ、物言ふ事も物憂く侍る」(七〇頁参照)と緘黙するのである。彼女はあまりに頭腦がよすぎた。他人をも自分をも、いつも水のやうな冷靜さを以て、客觀視する。この態度が人に紫式部といふ人は親しみにくい思ひ上つた女だといふ感じを與へるところである。

かうした修養家的な努力の喜びの一面、この赤裸々になれない、率直に自己を表示し得ない性情に、彼女自身さびしさと苦痛とがあつたに違ひない。

我を如何に面なく(鐵面皮デ)心淺き者と思ひ貶すらむ。(日記)

と、誤解されるのを氣に病んで、舊友にすら一層音信もしたくなくなる。しかもそれでゐて、その場合にすら

いかでか我が心のうちある様(心ノ在リ方)をも深く推し量らむ。(日記)

と、自分を理解されない孤獨感の悲しみと同時に又不思議な誇らしさをさへ感じるのである。この誇らしさこそ即ち彼女が無意識に持してゐる優越感であり(源語中の女性の六條御息所や明石上や葵上にすら賦與されてゐる此の性情は即ち又彼女の一面であるといへる)。日記に流れる清女にも劣らぬ程の自贊の滿悦であり、又その清少納言や和泉式部を難詰し蔑如する心なのである。尤もこの心の中心は又、對抗意識と嫉妬心、つまり自己の優越を意識的に再認したい焦躁もおのづから混つてゐることは確である。漢學者の父に舌を捲かせ、兄式部丞に顔色なからしめた幼時からの叡智、そして又空前絶後の大藝術を地上に築き上げた超凡の神才にとつて、同じ時代に皇后宮方として機智縦横の名を恣にする清少納言の「したり顔」が面憎くて、抑へ難い競争心の湧き起つて來るのは、彼女の性質として十分にうなづかれるところである。例の道長が渡殿の戸を叩いて式部に特別の關心を示した時、「あけてはいかに口惜しからまし」と、己れを護つたのも(七

七頁参照)、古來稱揚される節操の堅さのみでなく、寧ろ人知れぬひそやかなる感謝に似た満足の半面、自己の誇を疵つてたくない心高さと、批判的な冷靜な自己反省の心が式部に與へた決斷であつたと思はれる。彼女は自身の女としての弱さをよく知り抜いてゐる。それだけに又彼女は強いのである。空蟬君を評して彼女は「なよ竹」と言つた(帚木卷)。柔いが決して力では折られぬ、それが即ち又彼女自身の姿でもあつたと、重ねて言ひたい。

弱いから強く、矜持が高いから、一層謙抑に努力するのでもある。それは又自身へも、そして又他人へも一種の挑戦であり皮肉でもある。

心の底ゆかしきさまして……殊更卑下したれど、けはひ思ひなしも心にくく侮らはしからず。(若菜下卷)

といふ明石上に、一段明確に作者が投影してゐることは見逃せないと思ふ。

更に又、この弱い強さ、負けじ魂の競ひ心、執拗な執着、自分でも驚く程の嫉

妬、物を表裏からさまざまに推測して、自ら求める苦しみ、ともすれば憂鬱に傾きかける淋しい諦め、生活の喜びに思ひきり積極的になり得ない哀しみ、日記や家集に閃くそれらの片影の綜合は、かの二重人格に自らをのく六條御息所と性格の底に於て相通有するものをすら發見させずに措かないのである。

これに關聯して彼女の神経の細かさ、感受性の強さ、鋭さは、源氏物語中至る所に見られるところであり、その一面非常に緻密な頭腦の持主でもあることは、源氏物語の人物の心理描寫や、性格の創出や、情景の描寫などに、頁を間く毎に感じられる點である。

兎に角、紫式部といふ女性は、完徳圓滿な人として古來尊敬され、女人の鑑として理想的な實在と幻想され、——それは特に源氏物語で女主人公紫上を完全無缺の理想女人とし、書き上げた爲に、一層さういふ印象を與へられたものであらうが——就中七論の安藤年山の如きは「才徳兼備の賢婦」と筆を極めて讚美して

あるほどであるが、それが全然拒否されねばならぬ必要もないと同時に、なほそれは江戸時代封建道徳の慣習に依存した稍觀念的な觀方である憾があり、實際の式部は、もつと平安時代人的自由さを持つた、そして對異性生活でも社會的に一つと解放された雰圍氣に呼吸してゐた女性であつたことが閑却されてはならず、特に彼女の性情は以上述べたやうに頗る複雑で、一元的でなく、且實はかなり重苦しい努力家であつたやうで、それは恰も源語中の主要人物明石上の性格に最もよき相似を見出し得ること、單に前に觸れた謙抑の條件だけにとゞまらない。つまり明石上は即ち作者紫式部が現實社會に於て實存し且希求し得る限りの自己の姿の具現であつたといへる。

かくて彼女の性格は、既に老成した、子供らしさを失つたもののやうに考へられるが、事實は決してさうでなく、彼女の心の底に熱烈に求めてゐるものは、やはり無邪氣な朝らかな明るい、純眞な童心であつた。彼女が完全最高の理想女性

として空想し創出した紫上に與へた輝くばかりの童心は、彼女の心の憧れでなく、何であらう。「餘り見苦しきまで見めい」た可愛い小少將を最も親愛したのも、それに共通した心ではあるまいか。「はかなびたるこそ……」といふ夕顔卷の源氏の述懐も、やはり彼女の心の姿見でなければならぬ。こゝにも亦彼女の性格の複雑性が存する。

家庭人としての紫式部

紫式部が家庭生活に於て恵まれなかつたことは既に述べた。彼女が最も望んだのは、やはり女として妻として、暖い家庭の中の人として、幸福に日を送りたいことではなかつたらうか。夫を亡つた後の式部の悲歎、それは彼女の心の底にどうにもならない力となつて沈んだ厭世觀となり、宿命觀となつた。よき妻となる

理想は、既に破れたのであつた。しかもこの破れた理想を自身の作品の中に生かし、その中に希望を懸け、満足を求めてゐる彼女を我等は見出すのである。

彼女は第一に源語の女主人公紫上に於てその理想を具現した。その性格を、かどくしう、らうくしう、匂ひ多かりし心ざまもてなし、言の葉、(幻巻)と源氏に回想させてゐるやうに、無邪氣の中に利發で練熟で、しかもピリツとしたきかぬ氣があり、

人の深き心もいとよう見知り給ひながら、怨じ果て給ふことはなかりしかど、一わたりづつは、いかならむとすらむと思したりしに、(幻巻)

といふところがあつて、一層源氏の心をひきつけずには措かないのは、兩夜の品定に説かれてゐる如き

怨すべきことをば見知れるさまに仄めかし、恨むべからむ節をも憎からずかすめ云々。

といふ、夫君に對する愛の表現技術の要諦をも體得してゐるからなのであつた。

又所謂「さし向ひて見る程は」勿論「らうたく」、その上に

立ち離れては、さるべき事をも言ひやり、折節にし出でむわざの、あたごと(趣味生活)にも、まめごと(實生活)にも、我が心と思ひ得る事(帯木巻品定)

が常に謬らぬのみか、「深き至り」のある女君であつた。家事に行届き、趣味に偏せぬはもとより、子の姫、孫の宮から召仕の末々に至るまで慕ひ集まる淑徳高き室家であつた。それだけに夫君の熱愛と同時に尊敬をさへ受けて、源氏の生きる歡びは、その妻紫上の上にあつたといつてよいから、その死に遭うた時の源氏の悲しみは、生きる希望も力も凡てを失つて、「春の光を見給ふにつけても、いと昏れ惑ひたるやうにのみ」思はれるのであつた。此の同心一體の殆ど絶對的ともいふべき夫婦愛は、桐壺更衣を失はれた桐壺帝の御悲しみにも同じ姿が見られ、又葵上を失つた時の源氏の詠歎にもおのづから相通するものがあり、そして

それは亡き夫宣孝を、「なき人の煙となりし夕より」と戀ひ慕ふ式部その人の映身でもあるのである。そして又夫の歿後、妻の操を強く守り通しながら、淋しいともすれば沈みがちの心を勵ましては、娘一人を母の手一つで立派に訓育してゆかうと、頼りない中にも雄々しく決意して世を送る未亡人式部の中に、源氏物語の桐壺更衣の母北方の姿をも見るやうな氣がする。道長の求愛も、心の中では有難く感謝しつつも、許容する氣になれない式部には又、既に説いたやうに空蟬君や、或は光源氏の愛を竟に拒み通したあまがは権齋院、薰大將のそれを死に至るまで受容しなかつた宇治の大君に通有するものがある。

更により現實的、實際的な、家庭の貞淑にして周到なる妻女としては、又明石上が描出された。年に一度の七夕の逢瀬よりは仕合せでも、行住相棲の時を許されぬはかなさに、在りし日の夫の通ひを偲びつゝ、源氏に心からのくつろぎ所を提供しようと、己れを殺してひたすらに仕へる明石上に、作者はよそ事ならぬ共

感を覺えてゐるのは否まれないところである。彼女に尊い子寶の幸福を與へたのも、彼女に長生の悦びを與へたのも、同情ある作者の公平なそして満足した措置であらねばならない。

さてよき妻となる希望に破れた後の式部は、よき母として生きることを念願してゐるのを見る。家庭に於ける母としての彼女が娘に對する愛情は、父親がないだけに、一層深い強いものがあつたらうと想像される。彼女の娘に注いだ母性愛は即ち同時に父性愛でもあつたのである。

子の道の闇を思ひやるにも、男はいとしも親の心を亂さずやあらむ。女は限りありて言ふかひなき方に思ひ捨つべきにも、なほいと心苦しかるべき。(権本卷)

と、幼き姫達の行末を歎息する宇治八宮の、父性愛と同時に母性愛をも含む親心は、又式部のそれでもあらねばならぬ。光源氏の夕霧に對する訓育に於ける殿し

い父性愛と優しい母性愛も同断であり、桐壺院の源氏に注がれた御愛情にも、やはり御父性愛の中に亡き母君に代る細かい母性愛的なものが見出される。紫上の幼少時でも、源氏には「母なき子持たらむ心地」であり、「外なりける御女を迎へ給へらむやう」にさへ思つて、その美しい愛らしい人を、「心のまゝに教へ生ふし立て」て、理想の女性、理想の妻に薫育しようとして、音楽や學問・歌道を始め、女性としての完備した高い教養を授け習はせたのも、所詮愛兒に對する父性愛であると共に、それは又夫に代つての娘に對する式部の熱意でもあることは否定され得ない。それから朱雀院が特に女三宮に關して、院御出家の後は誰を頼みの蔭として生きてゆくことであらうと、そのみが絆となつて、御魚慮遊ばし、遂に源氏にその將來を御托しになつた上に、更に御出家遊ばしてもなほ、

その事となくしてしばしも聞えぬほどに、覺束なくてのみ、年月の過ぐるなむ哀れなりける。惱み給ふなる（病惱）さまは、委しく聞きし後、念誦の

ついでにも思ひやらるゝは、いかゞ。世の中淋しく思はずなる事ありとも、忍び過ぐし給へ。怨めしげなる氣色など、おぼろげにて見知り顔にほのめかす、いと品後れたるわざになむ。（若菜下卷）

と、細かくやさしくいたはり諭す御心遣ひに、慈愛あふれる御消息を賜はせられたのにも、或は又、一人娘をその出世の爲、且は孫娘明石姫の將來の爲に、老妻と共に遠く都へ送つた明石入道の、己れ一箇を犠牲にして、ひたすらに我が子の幸福を祈る切々たる父の愛（松風卷・若菜上卷）にも、涙なくしては讀めない感動を與へられる。それはそこにも亦常に作者が作品に融け込んであるからである。

その入道の娘明石上は、又特に強い母性愛に生きた人であつた。生みの子の姫の幸運の爲に百慮千思の惱みの末に、思ひきつて源氏のすゝめにまかせ、紫上の養女として我が膝下から手離した。これ亦一身の愛を犠牲にして、もつと大きな母の愛にそれを捧げたのであつた。身を切られるやうな切なさ、魂を奪はれるや

うな淋しさ、それをすべて唯娘の將來の爲と心一つにじつとこらへて、いよいよ今日はいとし獨り子を送り出す日、外は雪霰まじりの丁度今の自分の心のやうに重く暗い空模様である。縁近く出て、「常よりもこの君を撫でつくろひ」ながら、母としての最後のいつくしみを與へた。いざとなつてはさすがに物狂ほしきばかり、一緒に迎への車に乗らうと袖を引く幼子のたいげさに、

末遠き二葉の松にひき別れいつか木高きかげを見る
べき

と、やはり泣き臥してしまつた（薄雲卷）。しかもその悲しみも、養母紫上の深いいつくしみと、世の光と仰がれる源氏君の愛情の掌に、立派に成人してゆく娘の姿にせめて慰められつゝ、更にその明石姫が東宮妃（後、今上の中宮）として晴れの入内をした後は、紫上の思ひやりから明石上自らも御側に奉仕する身となり、終始姫の爲に後見をしたのであつた。この明石上こそ最も作者の姿に近い女性で

あることは、前にも再々指摘したところである。

宇治の浮舟君の母君も亦母性愛の強い人で、「いかでひき勝れて、おも立たしきほど」に浮舟を出世させたいものと、明暮そののみ念じて、その育成に餘念なく、義姉の中君に縋つてまでその好運を願うたのであつた。こゝにも亦娘によき將來を希ふ母式部の切實な心持が窺はれ得る。この他源氏物語全巻を通して、父性愛母性愛を強調し、敘寫してゐる例證は、一々擧げるの煩に堪へない。

以上述べるやうに、式部は現實の自身にあつて、家庭といふものを完全な幸福に於て育て得る宿命を持たぬ女ではあつたが、それだけに、人一倍、家庭愛の生活に愛着を持ち、憧れを抱いてゐたのであつたらう。源氏物語に寫出された夫婦愛にしても、父性愛にしても、將た母性愛にしても、凡て式部の理想と空想が懐かしく生氣ある姿で具現せられてゐるのに接するのである。

歌人としての紫式部

紫式部は所謂中古三十六歌仙の中に數へられ、女流歌人群の代表的な一人として世に知られてゐる。その詠歌は前に述べた如く勅撰集にも五十八首ほど採られて居り、家集や日記の歌の他に、源氏物語中の作だけで七百九十四首といふ大量が計上される。寡作の方でもなく、又凡作の人といふでもない。

殊に鎌倉時代初期以來、源氏物語は和歌の軌範として斯道に尊重せられて來た。當時の歌學の權威であつた俊成は、源氏物語を見ない歌よみは口惜しいと六百番歌合の判の詞に書き、正治奏狀にも

教長も清輔も源氏を見候はず。(中略)共にうたてき事に候なれ。

と論じた。又室町期になつても、源氏の研究家にして歌學者たる一條禪崗は、小

夜のねざめに、

時移り風變することわりはさることながら、歌よみの翫ばぬことになり侍る

は、如何なる事にかと覺束なし。

と、源氏物語を讀まぬ歌人に對して非難を向けてゐる。細川幽齋も「歌學の博覽第一の書」として擧げ(消閑雜記)、九條關白植通も「珍しき歌書」と推し(戴恩記)、

更に古くは八雲御抄にも

凡そ歌の仔細を深く知らむには、萬葉集に過ぎたる物あるべからず。歌のさまを廣く心得む爲には、古今第一也。詞につきて不審をもひらく方には、源氏物語に過ぎたるはなし。

との順徳上皇の御詞がある。これは一面我が國の古典研究が、主として歌學、歌論の立場から發足してゐることや、従つて又その研究家達が、大抵和歌及び連歌の専門家であつたことが、以上のやうに源氏物語を歌道の寶典と禮讚せしめるに至

つた縁由をなし、又一面、源氏物語全篇が一大抒情詩であり、且日本の物語文學それ自身が和歌及び歌物語から進展したことに起因するものであると共に、源氏物語中に含まれる數多くの歌は家集や日記のそれと併せて、やはり歌人としての紫式部の力量を世に問うたものであらねばならなかつた。家集や日記の歌は既に屢々引照した。源氏物語中の歌にも見るべきもの決して少くない。唯古來の評價については無條件には従ひ難いものがある。細流抄に、「此の物語第一の歌と云云」として、葵卷の六條御息所が源氏に贈つた

袖濡るゝこひちとかつは知りながら下り立つ田子の

みづからぞ憂き

を擧げてあるが、太平記の例の俊基朝臣東下りの道行文にも、

おり立つ田子のみづからも、浮世をめぐる車返し云々。

の一句があるくらゐであるから、古くから此の歌は相當もてはやされてゐたので

もあらう。しかしどうも佳調とはいへない。源氏第一の歌としてなぞ賛同出來ない。やはり細流抄には花宴卷の源氏の

世に知らぬ心地こそすれ有明の月の行方を空にまがへて

を秀逸とし、五文字を「殊更妙」と稱へてあるが、同様に適評とは同じ難い。又

俊成の女は須磨卷の源氏退去直前朧月夜に宛てた別れの歌、

逢瀬なき涙の河に沈みしや流るゝみをのはじめなり

けむ

を源氏第一の歌としてゐるが、これもあまり感心しない。いづれも縁語や掛詞の小細工に過ぎて、俊成の女などの趣味としてはうなづけるけれども、さまで名歌とも思はれない。但し紫式部の歌らしさといふ點からは却つて摘示されてよいかも知れない。

それらよりも私には若紫卷の、源氏が北山に泊つた朝の、
吹き迷ふみ山おろしに夢さめて涙催す瀧の音かな

や、明石卷の明石の浦で逢か都の紫上を戀ひ惚びつゝ詠んだ

秋の夜の月毛の駒よわが戀ふる雲居にかけれ時の間
も見む

や、浮舟卷の匂宮が遠い宇治の浮舟を慕うて、

ながめやるそなたの雲も見えぬまで空さへ暮るゝ頃
の佗しさ

などが、格調も措辭も不自然さがなく、心境と敍景の渾然融合した情趣的な快さを與へられる。中君が匂宮に迎へ取られたが、昔の宇治の生活を懐かしんだ

山里の松の陰にもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき
(宿木卷)

もすらくとよく詠まれてゐる。敍景歌としては、

春の日のうらゝにさして行く船は竿の半も花ぞ散り
ける (胡蝶卷)

あはと見る淡路の島のあはれさへ残る隈なく澄める
夜の月 (明石卷)

朝ぼらけ家路も見えず尋ね來し槇の尾山は霧こめて
けり (橋姫卷)

などが美しい情景を描き出してゐる。又

鐘の音の絶ゆる響きに音を添へてわが世つきぬと君
に傳へよ (浮舟卷)

のやうに、和泉式部でも詠みさうな歌も詠んでゐるし、

峯の雪汀の氷踏み分けて君にぞ惑ふ道は惑はず (同)

のやうな變つた表現の技巧を用いた歌もある。

要するに紫式部の歌は溫和で典雅で、決してあぶなげはないといへるが、何となく知的なものが先行して、天真の流露といふのではないやうな印象を受ける。

(上に例擧したのは實はその弊の比較的薄いのを拾出したので、他の大部分は寧ろ、「つくり過ぎた」といつた感じの作が常であるといつてよい。) そして一言で言ふなら、彼女の歌は人生派である。人生の苦惱や喜びや淋しさを歌つた歌にはすぐれたものが多く、自然のみを歌つた彼景歌は殆ど無いと云つてよいくらゐである。源語の文章中に單なる客觀的自然描寫といふものがないやうに、歌も主觀と客觀の交流したところに秀れたものを詠み出してゐる。

彼女はしかし技巧家ではあるが、和歌の本質即ち藝術を見失ふやうな知的技巧家では決してない。やはり天成の藝術家素質の作家であつた。その證據には所謂歌學とか歌學者とかいふものを非常に蔑視してゐる。光源氏が紫上と明石姫君の

教育の事について相談し合ふところに、姫君の學問に歌學は必要ないといふ意見を述べ(玉鬘卷)、又、末摘花君の歌を評して、

古代の歌よみ(末摘花君ヲ指ス)は、(例ノ紋切型ノ)「から衣袂濡る、」託言こそ離れねな。まろもその列ぞかし(私モ實ハソノ仲間サ)。(中略)昔の懸想しをかしき挑みには、「あだ人の」といふ五文字を、やすめどころにうちおきて(必ず置キ字トシテ使用シテ)、言の葉のつき、たよりある心地すべかめり。(中略)和歌の隨腦(歌論書)いと所狭う(面倒ナ法則ツクメデ)、病去るべき所(禁忌ノ數々)多かりしかば(中略)むづかしくて返してき。(同卷)

と辛辣に罵倒してゐるのは痛快である。それでゐて後世の歌學者達が、源氏を寶典と尊んだのであるから面白い。

少くとも歌人としての式部は清少納言よりは數段の優位を與へられて然るべきであることに異論はなからうと思ふ。けれども自身日記に論難してゐる和泉式部

には却つて及ぶこと遠いことは、又何人も認めざるを得ぬであらう。彼女の天職はやはり物語の才筆の上にあつた。

作家としての紫式部

紫式部はその性格が複雑であつただけに、彼女に創作せられた源氏物語の様相も單一的でないことは既に縷述したところである。従つて作家としての彼女の相貌も亦實に驚くべく多面的である。

彼女は第一に勝れた抒情詩人的作家である。それは源氏物語を一讀すれば、如何なる人にも直ちに同じ得られるところであらう。僅に須磨卷の一節を國文教科書で抄讀したに過ぎない中等學生にでも、源氏物語から與へられる第一印象は先づそれであるに違ひない。そしてそれは又、古來の源語繙讀者達の間にあつて

の定評でもある。

實に紫式部は源氏物語に於て美しい一大長詩を作らうと試みた。彼女は其處で美を寫しつゝ、物語りつゝ、又歌はうとした。天成の作者の豊かななめらかな情感がおのづからリズムをなして流れ出たところに、源氏物語の詩がある。確にそれはすぐれた抒情詩篇である。全體的にも部分的にも。作者は小説を書きつゝ、詩を作つてゐる。喜びの場面にも、悲しみの場面にも、淋しい場面にも、切ない場面にも、喜びには喜びの、悲しみには悲しみの、淋しさには淋しさの、切なさには切なさの詩を作つてゐる。既に例擧した如き、世俗にも知られた桐壺更衣母君の葎の屋の秋の賦、「八月十五夜隈なき」夕顔の宿の月光の曲、須磨の浦波の旅愁を始め、全卷の各頁各場面、その好資料は無盡藏である。

同時に彼女はあの浪漫時代に於て稀に見るリアリストである。彼女が如何にリアリストであるかは、源氏物語に於ける宮廷人の生活描寫が決して架空若しくは

粗雑なものでなく、一々克明な精寫であることによつて、的確に立證し得られる。

〔その實證は、源氏物語新考の「源氏物語論考」——客觀小説としての源氏物語〕と題する章下に特に數例を擧げて評論したことがある。〕後世の有職故實の研究者や史家が此の小説中の行事的記述や翌俗的描寫に、榮華や大鏡同様の史料價値を認めて殆ど怪しまないので、それが反證出来るであらう。リアリストと世に許される西鶴の一代男——それは即ち源氏物語の雛案である。——の終局は、世之介女護島渡りの御伽噺式であるのに對比して、その粉本たる此の原古典にあつては、光の一生も薫の日常も全然さうした夢物語に結末するのではなくて、あくまで普通の人間行動で終始してゐるのは、危く時代錯誤感をすら與へられかねないではないか。又その冷靜な現實描寫は、近代の自然主義作家の壘をすら摩してゐるのは奇蹟とさへ見える。空蟬卷と田山花袋の「蒲團」との比較がそれを例示するであらう。

彼女のリアリストとしての態度は、人生の觀照に於て、事實の考察に於て、素材の採取に於て、心理の分析に於て、特にさうであり、且描寫の手法に於て、決して曖昧を許さないとところに明白にそれが見られる。時代からいつても、女性であるといふ點からいつても、不相應なほどにリアリズムに徹してゐる。

しかもそのリアリズムが、惡寫實でもなく、皮相的なものでもなく、又曝露的でもなく、そして内容に於ても、表現に於ても、浪漫味と背反せぬ限度に於て豊かな詩趣に調和しつゝ、藝術的にリアルなものを創造してゆく天賦の能は殆ど驚異に値するのである。そこに又單なる現實主義以上の藝術家としての紫式部が居り、そして又美の創成者としての紫式部が居るのである。そして又同時に傑出した表現の作家、名文家としての紫式部が居るのでもある。

人間の解剖、就中心心理小説の作家としての彼女は又特に注目せられねばならない。前にも幾度か述べたやうに、紫式部は非常に反省的であり内面的であり、且